

皮肉な復讐

私が、まだ『時事』に居た頃だ。

澤田謙氏の肝煎りで、『朝日』の永井萬助氏、清澤冽氏、『報知』の池田林儀氏などと一緒に、高崎市に、講演に出かけた事があつた。

澤田氏が是非にといふので、何が何やらわからずに、無理やり引張り出された一行は、會場に着いて先づ、『東京五大新聞幹部記者出演、文化大講演會』といふ、どえらい大看板に度膽をぬかれ、更に開會となつて、文化講演會といふふれ出しなのに、政談演説とでも勘違ひしたか、官服いかめしい警官諸君が、演壇の右手に陣取り、肩臂怒らして控へて居る物々しい光景に、再び、驚異の瞳を見張らざるを得なかつたのである。

順番は抽籤で、僕が前座を承はり、そのあとが池田氏、清澤氏、永井氏といふ順で、殿りは澤田氏が勤める事にきまつて、僕が真先きに演壇にたつた。

プロの肩書を見ると、時事新報編纂局長とある。いつか大分縣中津に出かけた時には、時事新報主筆となつて居た。新聞辭令に對する當てこずりかと、微苦笑を禁じ得なかつた。

僕が、二三分しやべつて、其のあとが池田氏、三番目にのツそり現はれたのが清澤氏だ。

題は、ちよつと忘れたが、

『物は考へ様によつて、いろ／＼に取れる。たとへば、大逆事件の判決に對して……』と言ひかけた時、警官席の後に居た署長か誰かど、何と勘違ひしたか、直ぐ前に頑ばつて居る警部補のお尻を、いやといふ程つついたからたまらない。

カメラオンのやうに顔色をかへた若い警部補は、いきなり椅子からたちあがつたかと思ふと、突拍子もない大きな聲を出して、

『べ、べ、べ、辯士、注意！』と、どなつた。

さすが、千軍萬馬の中で鍛へあげた清澤氏の膽ツ玉も、この時ばかりはギリギリとしたらしい。それもその筈、

『……判決に對しても、世間では彼是れ言ふ者もあるやうだが、考へて見れば、寧ろ當然過ぎる位當然だ。』といふ意味を述べるつもりだったのに、それを反對の意味に曲解して、まだ何ともいはないうちに、

『辯士、注意！』をくつたのだから、驚くのがあたりまへだ。

清澤氏の童顔が、ちよつと曇つた。

曇つたが、直ぐに晴れた。

清澤氏は、昂奮して、まだ其の場につつたつて居る警部補の顔を見ると、つい笑ひたくなつたのである。

清澤氏は、ニヤリと笑ひながら、其の儘論旨を續けた。

無論、最初から、注意を食ふやうな不穩な演説ではないのだから、署長も、警部補も、一旦握りかためた拳固のやり場に困り、互にもぢ／＼してゐるうちに、清澤氏は、サツサと結論してサツ

サと降壇した。

聴衆は、一齊に拍手喝采した。其の拍手の中には、警官の非常識に對する反感が、多分にふくまれて居た事、勿論である。

二

そのあとに、永井萬助氏が起つたのである。

ずんぐりした清澤氏と、人並はづれて、せい高のツぼの永井氏との對照が、既に皮肉である。演壇に起つた永井氏は、おもむろにポケットからハンケチをつまみ出して、それをいぢくりまはしながら、警官席の方を、見るでもなく、見ぬでもなく、コツプに水をついで一口のんで、また改めてハンケチをまさぐりながら、

『私の演題は、ゆとりといふ、ふしぎな題であります。』と、低い、しかしハツキリした口調でかういつて、もう一度、警官席の方をながしめに見ながら、我々の心に、ゆとりといふものが、いかに大切であるかといふ理由を、盾々とのべたあとで、

『現代人に、一番缺けて居るのは、此の心のゆとりである、殊にそれが日本人に著しい。』といつて、いろんな例をあげてこれを説明し、最後に話頭を一轉させて、

『私がロンドンに参りました時、一番愉快に感じましたのは、警官の深切な事であります。』

何か、わからん事があつて尋ねると、かんでふくめるやうに話してくれる。決して威張つたり、けんつくを食はせるやうな事はない。』で、ちよいと警官席に微笑を投げて、

『人民の方でも、また決して、警官を他人扱ひ、お役人扱ひにはしない。』

お互に金を出しあつて、さうした事務をやつて貰つてゐる、をぢさんぐらゐに思つて居るから、別に、ペコ／＼もしなければ、敬遠するやうな風もない。

道で警官に會つて、おはやうといへば、向ふでも、ニツコリ笑つて、おはやうと答へる。

ポケットから、葉巻を一本取り出して、いかゞですと言つて差出せば、ありがたう、といつて快く受取る。

直ぐにのみたければ、火をつけて貰ふし、のみたくなければ、自分のポケットに入れて行つてしまふ。それが決して、警官の威厳を冒瀆もしなければ、それがために、瀆職罪に問はれる事も

ない。

尤も、中にはそれを一つの贈賄、收賄の意味に取つて、容疑者などが、若干の銀貨を、人知れず警官のポケットに捻ぢこんで、眼で二三度合圖をすると、警官の方でも心得て、見て見ぬふりをするやうな例がないでもないさうです。

これなぞは、實に怪しからん話で、こんな事は、日本の警官諸君には絶対にない。これは、無論、日本の警官の方が遙かに正しく、遙かに立派であります。その點はまことに感心しないが、むかふの警官諸君には、どことなく愛敬がある。

第一、圖體が大きい。従つて、身體にも、心にも、ゆとりがあるやうに見える。

日本人でも同じ事、骨立瘦身の人よりも、布袋や大黒のやうな肥ツちよの方が親しみ易く、心に、ゆとりがありさうに思へる。』

三

『一度、こんな事がありました。』

私が、ロンドンのピカデリーを歩いて居ると、大へんな人出で、文字通りの車馬絡繹、向ふ側に行きたいにも、あぶなくて、とても渡れさうもない。

人道の上で、いら／＼して居ると、一人の警官がやつて来ました。

「どうしたんです？」といふから、ありていにいふと、その警官はニツコリ笑つて、いきなり私の身體を横ツちよにかゝへて——諸君は、まさかと思はれるか知らんが、本當ですよ。私は五尺七八寸ある。日本人としては大男の方が、イギリスの警官諸君に較べたら、子供と大人ほど違ふ。五尺七八寸の私を、横ツちよに抱へる位は、お茶の子さい／＼だ。

警官が、右手の指をちよいとあげたと思ふと、今まで、疾風のやうにかけて居た自動車も、馬車も、ピタリととまりました。

日本でも、東京の交通巡査は、青い縞のきれか何かを腕にまきつけ、笛をふいたり、両手を前後左右にふりまはしたり、まるで體操でもするやうな恰好をして、極力、交通整理をやつて居りますが、イギリスの警官は、指一本で、何百臺の自動車、電車、馬車を自由にする。

交通が止まつた處で、警官は、私を横抱きにしたまゝ、サツサと向ふ側に渡してくれて、まる

び可愛い坊やでもあやすやうに、

「さア、もういゝでせう。クードバイ！」といつて、直ぐ元の場所へと引きかへしました。

諸君は、私の話をきいてお笑ひになる。なるほど、五尺七八寸もある私が、可愛い坊やもないものですが、兎に角、イギリスの警官諸君には、これだけの餘裕があり、身にも、心にも、これだけのゆとりがあるといふ、一例にまで申上げたのであります。

もしです……もしもです、我が日本の警官諸君にも、イギリスの警官諸君ほど身體にゆとりがあり、心にゆとりがあつたなら……』といつて、こゝでまた警官席に皮肉な微笑を投げて、

『おそらく、先刻のやうな注意をなさかなかつたらうし、前辯士もまた、あのくらゐの事で、講演の途中、注意を食つて、まご／＼する事もなかつたらうと思ひます。私のお話はこれでおしまひです。』

かういつて永井氏は、サツサと演壇を下りたものである。聴衆の哄笑、警官の苦笑をあとにして、すました顔をして辯士控室に引きあげて來た永井氏の顔を、諸君にも一度見せたかつた。

美談になるまで

—

趣味講演と少年講談で、足跡、日本中に遍しといはれて居る天野雉彦氏が、いつか、久留島邸で開かれた回字會で、こんな話をした。

『人には、それ／＼道楽といふものがあるものだ。私にもある。それは寫真であります。』
『しほらしいなア。もツと外にもありさうだぞ。』と、誰やらが半疊を入れた。

天野氏は、話もうまいが舞踊もうまい。講演が終つて歡迎會となると、必ず此のお得意のかくし藝を演じて、満座の阿嬌を驚嘆せしめ、眩目せしめる。

『天野君の舞踊はかくし藝ぢやない、表藝だ。』と、友人間の専らの取沙汰。此の半疊の出る所以である。

『よけいな事を言つちやいかん!』と、口では言つても、内心はニコ／＼ものゝ天野氏である。獨得の大きな眼に笑ひをたゞへて、さて徐ろに語り出した。

『かるが故に吾輩は、旅行といふと、何をおいても、必ず愛機の携帯を忘れない。』

尤も、一時寫真機全盛の時代があつて、寫真機を持たないと幅がきかないやうに思つて、寫真機のサツクの中に辨當を入れて、得意がつて居た人もあつたさうだが、吾輩のは正真正銘の寫真機、七十何圓といふ大金を投じて、手に入れた代物だけに、主人の寵愛もまた格別、常住坐臥……は、ちと大袈裟だが、人車、汽車、馬車、自動車のドライブ、寸時も手放した事がないといふ熱愛ぶり、それを迂濶にも大阪で、遺失したのが椿事の發端。——まア聞いて下さい、かういふ譯なんです。

大阪に一泊、宿の前から、通りがかりの圓タクに飛乗つて用事をすまし、三越の展覽會を見物、そこで友人と會談、待たしてあつた自動車に乗つて大阪驛までかけつけ、車をかへして、待合室でまつ事十數分、乗車券と急行券とを買つて、明日の朝の何時までに、目的地に着くといふプログラムを、心の中でくりかへしながら、ドレ、そろ／＼改札口へ出ようといふ時になつて、はじ

めて気がついたのは寫眞機です。寫眞機がないのです。』

二

『私は、ハツと思ひました。』

他の荷物は、全部あるのですから、寫眞機だけ盗まれたとは思へない。

私は、慌てゝ宿屋に電話をかけました。

出て来た番頭にきいて見ると、

「ありません。」といふ。

「お前ではわからん。女中を呼んでくれ。」といふと、係りの女中が電話に出て来た。

「いくら捜してもありません。」といふ返事だ、私はズリ／＼して来ました。

他の物なら、いゝわであきらめましょうが、あの寫眞機だけは、日本國中は愚か、布哇でホレ／＼節をきいた時も、飛行機でドーバー海峡を横断した時も、片時放さず持つて居た愛機だけに、私にはどうしても諦めきれないので。それだけに私の胸は沸きたつやう。

プラットホームでは、發車のベルが頻りに鳴つて居るが、今はそれどころの騒ぎぢやない。

私は、驛前の交番にかけ込んで、自動車を調べて下さいと頼んだが、番號がわからんぢや、尋ねようがないといはれて、ギヤフンとまゐつた。拾得物の届はと聞くと、何もないといふ。

「念のため、もう一度宿屋に行つて見よう。」

私は、直ぐに圓タクに飛びのつて宿屋にかけつけ、番頭や女中にあつて、いろ／＼きいて見たが、たしかに、寫眞機はお持ちになつて居たやうですと皆がいふ。

いよ／＼自動車の中に置き忘れたものに違ひない。草をわけても、さがさずんばあるべからずと、私はひとりで焦慮したが、さていゝ智恵が浮ばない。

無論、番號さへわかつて居れば、さがすのにわけはないが、それが分らないのだから、手のつけようがない。

「何か、あの自動車に見覚えがありませんか？ 塗色とか、飾りとか、マークとか……。」

「さア……。」といった番頭の一人は、「たしか黒塗りの箱自動車で、車内の飾りは赤いクロスで、マークは菱形の中に、Kの字が書いてあつたやうに思ひます。」と答へた。

「しめた！」と、私は雀躍した。

これだけわかれば、番號がなくても、どうやら捜せさうに思はれたからである。

シャルツク・ホルムス何者ぞと、鼻うごめかした吾が輩は、再び圓タクを驅つて、警察に出頭した……。

三

『天野君、一體それからどうならうといふんだ。「美談になるまで」といふんだらう、いつになったら、美談になるんだ？』

『せくなく。これからが本題だよ。』と破顔一笑した天野氏は、相變らずの調子で語り續けた。

『警察で調べて貰つた結果、菱にKの字のマークのついた自動車の所屬は、直ぐにわかつたが、そこへ行つて見ると、私の處ではないといふ。』

それでは、他に似よりのマークがあるかときくと、菱の中にMの字の會社があるといふ。なるほど、KとMなら見違へないとも限らない。

そこで、早速、その自動車屋を訪問すると、たしかに手前の所の自動車らしいが、その自動車は出拂つて、今どこに居るかわからない。歸つて來たら調べた上で、もしあつたら東京のお宅へ御通知しませうといふ事で、さすがの名探偵も、スゴく東京に歸る事になつたが、一應友人にも頼んで置かうと、四度圓タクを呼んで三越に走らせ、用事をたしての歸るさに、呼びとめたのが一臺の自動車、飛びのるが早いのか、

「急いで大阪驛へ！」といふ吾輩の顔を、しげくと見てゐた運転手が、

「失禮でございますが、あなたは天野先生ぢやありませんか？」といふ。

「え、僕は天野だが、君は……？」といひながら、運転手の顔を見かへしたが、どうしても思ひ出せない。

すると運転手は、急に元氣づいて、

「いや、先生が御存知ないのはあたりまへです。私は、先年、先生が高知縣の山の中へ御出でになつた時に、御講演を伺つた一人なんです。」と申します。

なるほど、それでは思ひ出せない筈だ。

よく聞いて見ると、高知縣のうちでも、ひどい山中の一寒村、自動車は勿論、人力車さへ通じない山路を、郡視學の先導で出かけたのが二三年前、何でも二三十人も集つた席上で話した事がある。其の時の聴衆の一人が、此の運轉手君なのである。

「そりや奇遇だ、よく覚えて居てくれましたね。」といった吾輩は、

「だから、悪い事はできないものだ。」と、心の中でしみ／＼思ひましたね。世間は全く廣いやうに狭い。」

四

『運轉手が話しつゞける。』

「何しろ、御存知の通り邊僻な田舎、いつまでくすぶつてゐた處で、頭のがりツこがないと思つたのと、一つには、先生の御講演に感激して、働いて蓄めた若干の金を持つて、昨年春大阪に参りましたが、今更、學校といふ柄でもなし、取敢えず、自營自活の一方法として選びましたのが、此の自動車の運轉手です。約一年間働いて得た金に貯金を加へて、買取つたのが中古の此の

自動車なんで、おかげで、どうやら食べられるやうになりました。」といふ述懐をきいて、吾輩は、少からず此の健氣なる青年の意氣と、努力とに敬服すると同時に、講演家の端くれとして、何ともいへない愉快を感じたのであります。

「うーむ、そりや偉い！ 雞頭となるとも、牛尾となるなけれど。

偉い！ 偉い！ 全く偉い。飽くまでしツかりやつてくれたまへ。僕も、かげながら君の成功を祈らう。」

かういつた私の眼からは、偽りならぬ熱い涙が流れました。

「ありがとうございます。誓つて、先生の御教訓を忘れません。」

運轉手の瞳にも、美しい涙が浮びました。

「もし大阪に御出の節は、何なりとも喜んで御用を勤めますから、御遠慮なくおツしやつて下さ

す。」

「有りがたうー」といつた私の胸に、此の時、いなづまのやうに閃いたのは、寫真機の事であり

此の青年は、自動車の運転手である。運転手と運転手、そこには何等かの連絡があるに相違ない。こりや天佑だ、と私は思ひました。

私は、車中で、一切を此の青年に物語りました。

「わかりました。断言はできませんが、大てい大丈夫だらうと思ひます。よろしうございます。早速取調べまして、先生の御宅まで御報告いたしませう。」

私は、アドレスの入つて居る名刺を青年に與へて、くれぐれもよろしくと頼みました。寵愛の寫真機が、今にも私の手に戻つて来るやうに思つて、私はすっかり愉快になつてしまひました。」

五

『やがて大阪驛に着きました。私は、所定の賃銀と、若干のチップを青年に與へようとしたが、青年は、どうしても受取らうとはいひません。』

「私は、こんな嬉しい事はありません。私の力でできる事で、幾分でも、先生の御役にたち得たと思へば満足です。」

かういつて、此の奇特なる青年運転手は、無理に、私の手をふり拂ふやうにして別れを告げました。

「吾輩の講演も、満更すてたものでもない。」

さう思ふと同時に、自分の双肩には、重大な責任が加はつて居る事を自覺して、何かしら、襟を正さずには居られなかつたのです。

それから間もなくです。

問題の寫真機は、四國の山奥で、たつた一度、私の講演をきいてくれたといふ本當の知己、彼の深切なる青年運転手君の手により、鄭重なる書留小包として、無事、私の手許へ送り届けられました。

失はれた物が、再びわが手に返つて來た喜びよりも、私は、先づ、人の情の辱けなさ、有難さに泣かされたのです。

「舌を粗末にしちや、すまないね。」

私は、家内にかういつて、差出人の名の書いてある包紙を、両手でソツと押し戴きました。

「美談となるまで」のいきさつ、御静聽を感謝いたします。」

六

『心にくきまで巧妙なる話の組立である。さながら、名探偵の手柄話にきゝ入るやうな心持で、眼を輝かし、胸ををどらして傾聽した。單に、話方としても非常な成功である。』

司會者久留島氏は、かういつて天野氏の幸運を祝福した。

『全く同感ですな。』といった回字會員は、改めて、天野氏の成功を祝する意味に於いて拍手した。

所要時間、約一時間、天野氏の話は、微に入り細に互つて、全く面白い探偵談を聴くやうであつた事を、附記して置く。

機智のストツク

一

學校の講堂なり、雨天體操場なりに、その學校の兒童だけを集めて話す場合には、めつたにそんな事はないが、數校の生徒と一緒に、公會堂や、劇場、活動寫眞館などに集める場合、若しくは、學齡前後から、高等科の生徒まで、さては赤坊を抱いたおかみさん、孫をつれたお婆さんまでがツくるめて、千五百人、二千人といふ烏合の聽衆を、不完全な會場に集めて話をする場合、吾々は、度々演壇の上で泣かされる。

それも、開會後一時間位は、どうにか收拾の途もあるが、二時間、三時間となると、どんな老練な話者でも、手のつけようがない。

ワイン／＼ガア／＼、まるで蜂の巢をつついたやうな混亂の中で、何を話した處で、聞える筈

もなければ、また聴かうといふ氣もない。

そんな時にはどうしたらよからうか？

それが、或日の話方研究會で、問題となつた。

岩村清四郎氏が、演壇に立つや否や、無言で兩手を前につき出し、それを靜かに前にさげ、今度は反對に高く天にあげた。

二度、三度、同じ動作をくりかへすうちに、聴衆は、すっかり、話者のふしぎなゼスチュアに氣を奪はれ、口をポカンとあけて、演壇を見つめて居る。

そこを狙つて、話の緒口をきつたといふ、巧妙なるトリックが問題となる。

混亂の後を承けて、演壇にたつた時、偶然、ポケットから小さな紙屑が落ちた。

無意識にそれを拾ひ取つて、聴衆の前にたつた話者は、一言も口を開かず、その紙屑を、馬鹿丁寧に、眼の前で擴げはじめた。

擴げて皺をのし、皺をのして、熱心にそれを見つめた。

何だらう？

何が書いてあるのだらう？

聴衆は、あツけに取られ、鳴りをしづめて話者の動作に見入つた。

そこをつかまへて、二十分の話、どうにか演了したといふ、櫻葉勇氏の實驗談が出る。

私にも、僕にもと、苦い經驗談がいくつか出たあとで、久留島武彦氏が起つて、

『これは餘談だが……』と前置きして、こんな話をした。

二

府立第一高女の卒業生の送別會、當日出來事である。

第一部の式が終つて、第二部にうつると、眞先きが高峰筑風氏の筑前琵琶だ。

今でこそスツカリかどが取れて、少しもいや味はなくなつたが、賣出し當時の高峰氏は、尊大ぶるの、傲慢だのと、随分悪口を言はれたものだ。

その高峰氏が、千人近い女學生の前で、得意の一曲、『旅順開城』を彈奏しようといふのだ。氣取らざるを得ない。

悠々と座についた筑風氏は、おもむろに琵琶を抱いて瞑目した。態度はどうでも、聲は天下一品だ。

演奏がはじまると、さしもざわめいて居た會場の、隅から隅まで、水を打つたやうにしーんとなつた。

盤上玉をころがすやうな美音は、あざやかなる撥さばきと相まつて、洗練された節まはしに、満場の聴衆を魅了しつゝ、曲はいよゝゝ進み進んで、守將ステツセルの悲壯なる心事——刀折れ矢盡きて、降を敵の軍門に乞ふべく餘儀なくされた、敗將の心事に及ぼうとした時、突如として場内の一隅に、クスクスといふ笑聲が起つた。

と、笑聲は見る／＼四方八方に傳播して、あつちでもクスク／＼、こつちでもクスク／＼がはじまつた。

何しろ、砂がくづれてもをかしい年頃の娘さん達だ。一人が笑ひ出したらきりが無い。

何百人の女生徒たちは、いづれも顔を眞赤にして、下を向いたまゝ、クスク／＼クスク／＼と、一所懸命に笑ひをこらへて居る。

筑風氏は、ムツとした。

『名人の演奏最中に、笑ふとは何事だ。おのれ小娘の分際で……』と、一時はムカムカツと来たが、ぢつと我慢をした。

我慢をしながら弾奏をつゞけて、曲中のクライマックス、乃木、ステツセル、兩將會見の一段に及び、

『ステツセル將軍は……』と、聲をはりあげた時、ヤツと鎮まつた笑聲が、再び場内に爆發した。しかも、今度はクスク／＼どころか、ドツといふ笑ひの爆弾だからたまらない。

先刻からムカ／＼して居た筑風氏は、いきなり、片手に琵琶、片手に撥をつかんで、壇上にたちあがつたと思ふと、あらん限りの聲をはりあげて、

『馬鹿ッ！』と、どなりつけた。

『苟くも、忠勇義烈なる乃木將軍一代の勲業、旅順開城の演奏をきいて、感涙でも流す事か、笑ふとは何事だッ！

きさまたちのやうな、忠義も、藝術もわからんやうな低能兒に聽かせるために、吾輩は、琵琶

を演奏して居るんぢやない！』

怒氣満面、阿修羅のやうに、ハツタと女生徒席を睨みつけた權幕に、満場の聴衆は色を失つた。これは、怒る方が本當かも知れない。

併し生徒の笑つたのは、琵琶がまづい爲めではなかつたのだ。

その學校の教師の中に、容貌が、寫眞で見たステツセルにそっくりだといふので、生徒間に、ステツセルと渾名されて居た先生があつた。

其の異彩ある容貌の持主が、當日、演壇の右手に陣取つて、兩腕をくんで傾聽して居たのだ。

感じ易い老先生の顔面神経は、極度に緊張して、時々、大粒の涙がポタ／＼と落ちる。

『あら、ステツセル先生が泣いてるわ！』

誰かど、そつと私語した時、

『ステツセル將軍は……』と來たのだ。

をかしいやね。

最初のクス／＼は、それだつた。その笑ひが、どうやら鎮まりかけた時、再び、

『ステツセル將軍は……』と、來たからたまらない、こらえ／＼た笑ひの爆弾が、ドツと爆發したのだ。

併し、筑風氏に、それがわかる筈はない。

わからないから、カン／＼になつて怒つたのだ。眞ツ青になつて、猶も罵倒をつづけようとする時、右手の職員席から、ヒラリと演壇に飛上つたのは、教頭の市川源三氏だ。

『おい、藝人のくせに生意氣な事をいふな。きさまはをとなく琵琶をやつて居ればいゝんだ。坐れツ！』

『なにをツ！』と、今度は市川氏の方をむいて、筑風氏はどなつた。

『謝禮を貰はなけりや藝人ぢやないぞ。誰が、こんな土百姓共に、吾輩の藝術を聞かせてやるものか。歸る！』

『歸れツ！ 生徒を叱るのは教師の役目だ。餘計な事をいはずに、サツサと歸れ！』

市川氏は、いきなりに筑風氏の腕をつかんで、演壇から引きずりおろし、職員室へと拉し去つた。大風一過、そのあとが、女生徒だけに大變だ。

或者は、申譯ないといつてワアワア泣き出す。最初に笑つたのは、私ぢやないわといふ者があれば、皆さんが笑ふから私も笑つたんだわと、べそをかく者もある。職員の一人在が聲をからして、『何でもない。静かに静かに……』と制して見たが、堤をきつた涙の洪水が容易に収まる筈はない。ワア／＼、ガアガアの最中に、おくれてかけつけたのは久留島氏だ。

廊下の處で、顔色をかへた市川教頭と筑風氏とが、つかみあはんばかりにもつれ合つて行くのに、バツタリ出あつた久留島氏は、

『一體、こりやどうしたんです？』と、理由をきくひまもあらばこそ、直ぐに演壇へと案内されたのである。

さすがの久留島氏も、これには、いさ／＼か面くらつた。女生徒はワアワア、シクシク泣いて居る。職員や來賓は、眼の色かへて興奮しきつて居る。正に前代未聞の椿事である。

一時は面くらつたが、さすがに久留島氏である。すぐにたち直つて、例の、氏獨得の、錆のある大きな聲で、

『何です、皆さん、そんなに大きくなつてメソ／＼泣くなんて、をかしいぢやありませんか。殊

に、今年卒業なすつたお姉さん方は、遠からず島田鬚を結つて、お振袖か何かを着こんで、お嫁さんになる人ぢやありませんか……。』ときり出した。

此の策戦はみごとに當つて、今までべそをかい居た女生徒たちは、あわて、ハンケチを取出して、涙をふき／＼、クス／＼笑ひ出した。

『お嫁さんになる……。』が笑はしたのである。『赤い手柄をかけたお嫁さん』は、女學生を笑はせる最上の武器なのである。

しめたと思つた久留島氏は、ニツコリ笑つて、直ぐにつゞけた。

『それなのに、どうしたといふんです。こんなおめでたい席上で、未來の花嫁さんが泣くなんて……。第一、セツかくのお白粉が、ところツばげになつて、お化粧がだいなしになるぢやありませんか。』

満場の聴衆は、ドツと來た。

しかし、今度の「ドツと」は、涙の洪水ぢやない、笑ひの洪水だ。

笑ひがすっかりをさまるまで、思ふ存分笑はして置いて、それからいよいよ本題に入つて、約

一時間の長講演を、しんみりと聴かせたのである。

講演家には、機智といふ事が、最も大切だといふ一例として、此の體驗談は、此の講演大家の實驗苦心談は、たしかに傾聴に値すると思ふ。苟くも、講演壇上にたうといふ人は、どんな會場、どんな聴衆、どんな難局にぶつかつても、びくともしないやうに、臨機應變、ウキツトのストツクを用意して置くべしだ。

演壇の苦盃

一

講演で地方をまはると、随分、いろんなめにあふ。お寺で説教の眞似事をさせられたり、工場で男女の工員に修養談をやらされたりする。それ等はまだいゝうちで、一番弱るのは、政談演説に引ツ張り出される時だ。

數年前の事だ。

青年團の發會式に講演を頼まれて歸省して見ると、町では、市會議員の選舉で、眼の色變へて騒いで居る。

しかも、その候補者の一人に、長兄が擔ぎあげられて居るのである。

車中で、地方新聞をふと見ると、来る何日、市の公會堂に於いて、A氏の政見發表演説會があ

つて、それにはA氏の令弟が、態々東京からやつて来て、推薦演説をやると思つてある。似たやうな名前だと思つたら、其の筈だ。Aといふのは長兄で、令弟といふのは私の事だ。處が、本人の私は、青年團の發會式に招がれて來たのであつて、長兄の應援の爲めに來たんで何でもない。従つて、推薦演説なんて、思ひもよらない事だ。歸宅早々、取消を迫ると、長兄のいふ事がいふ。

『私にも相談せずに、推薦者が勝手にきめて、新聞に書かせたんだが、發表した以上、今更取り消すわけにもゆくまい。すまないが、童話でも何でもいふから、やつてくれ。』

馬鹿々々しくて、お話にもならないが、新聞紙に發表された以上、公約だから止むを得ない。腹をきめて出る氣にはなつたが、さて何を言はうか……之にはほと／＼思案にくれた。私は考へた。

當日、私の話を聽かうと思つて來る者があるとすれば、一度なり二度なり、私の童話か、通俗講演をきいた人で、畑違ひの私が、政談演説會で、どんな話をするか、それを聽かうといふ好奇心に違ひない。

『こいつ、いよく／＼うツかりできないぞ。』

私は、更に再考し、三考した。

もと／＼政治には門外漢だ。殊に、地方の政情なんて、まるで知らない。

知りもせぬ政治問題に嘴を入れて、揚げ足でも取られたら、それツきりだと思つたから、私は、一切さうした問題にはふれずに、アイロニー一點張り、聽衆を煙に巻かうと考へた。

可なり、人の悪い策戦だ。

二

愈、當日となつた。

來たワ／＼。

どこの政見發表演説會にも、百五十人か、二百人どまりが相場だといふのに、當夜の聽衆は、反對黨の新聞でさへ、優に六百はあつたと書いた位だから、七八百はあつたらう。

演壇の右手には、ズラリと警官が控へて演説を筆記して居る。之も私には、はじめての經驗だ。

演壇の後には、ズラリと演題が書いてある。最後のビラには、『敢えて我兄を推薦す』とあつて、其の下に、私の名前が書いてある。

私が會場に姿をあらはすと、期せずして、會衆の眼が私の身邊に鍾まつた。てれくさい事、夥しい。

新聞社の主筆、地方有志、長兄の演説がある。野次が八方から飛ぶ。選挙法の改正で、今はやれなくなつたが、其の頃の野次はひどかつた。

『簡單！』

『陳腐！』

『ノウ／＼！』などは、まだいゝうちだ。

『黙れ！』

『引ッこめ！』

『叩き落すぞ！』

ひどい事をいふ。

形勢、頗ぶる非だ。

そこへ、私が引き出された。

尋常手段ではいかないと思つたから、私は、わざと落着きばらつて演壇に上つた。

私は、微笑した。

聴衆もつられて微笑した。

パチ／＼といふ拍手が起つた。

私は、デロリ、左手の警官席に眼をやりながら、

『私がかうした席上、警官諸君列座の前で演説をするのは臍の緒きつて始めてだ。恥かしいのと怖いので、見合ひに来た花嫁のやうに、身體がふるへる』といふと、聴衆はドツと笑つた。

『しめたッ！』と思つた。

少くも聴衆が、私の話の波に乗つた證據だ。

私は、靜かに後のビラを見上げながら、

『私の演題は、「敢て我兄を推薦す」と書いてありますが、あれは、主催者が勝手にきめたので、私

の關する處ではありません。

私は、長兄を市會議員に推薦する氣なんか毛頭ない。寧ろ、長兄が、政治界に首をつつこむ資格のない男だといふ事を、諸君に訴へんが爲めに、此の壇上に立つた次第であります。』

かういつたやうな意味を、ツケ／＼と述べると、聴衆は、またしてもドツと笑つた。同時に拍手喝采が八方に起つた。

三

是れでスツカリ度胸がすわつた。

あとは、もう、何でもない。

演説の成功、不成功は、最初の五分間だといつた、誰やらの言葉が思出された。

某大臣のボツキヨ、ホコトン演説を冒頭に、

『東京の市會議員は、砂利を食ふ齒、鐵管を丸呑みにする咽喉、復興材料のトタンさへ消化する胃の腑の持主だ。』

ところが、私の兄は、幸か不幸か、そんな偉大、異常なる五官の持主ではない。

彼は、極めて小膽なる正直者で、悪い事のできない、嘘のつけない、酒ののめない、女房以外の異性を知らざる朴念仁だ。私が、彼を政治家たる資格なしとする第一の理由である。』といふと、満場哄笑、萬雷の如き拍手喝采が起つた。

もうよからうと、開き直つた私は、

『かう言つたならば、諸君は、或ひはいはれるだらう。』

それは、東京市會の話で、此の町の市會とは違ふ。

我が郷土は、昔から東洋政道の理想境といはれた土地で、君は民の心を心とし、民は君の心を心として、相睦び、相親しみ、三百年の太平を持続した君子の國だ。天保のお國がへ事件は、其の一例ではないか。

其の君子國の首都に、はじめて市制を布かれて、はじめて選ぶ市會議員だ。東京のやうな札つきや、政治ゴロは眞平御免、馬鹿で正直、結構、女房以外の異性を知らざる朴念仁、至極いゝぢやないか、といはれるならば、僕また何をか言はんやだ。どうぞ、清き一票を私の兄に投じて下さ

し。』と結んで壇を下りた。

言葉は違つて居たかも知れないが、意味には大した違ひがないつもりだ。

拍手喝采以外、遂に一言の野次をも浴びずすんだ事だけでも、望外の成功であつた。

歸京して後、其の事を岸邊福雄氏に話したら、氏も、古島一雄氏の爲めに、應援演説をやつた時の苦心を物語られた。その要領は、別項『童話家の應援演説』に就いて御覽を願ひたい。

猶ほ、私が長兄の爲めに辯じた『二つのほことん』演説と、東京市會議員Y氏の爲めに辯じた應援演説の原稿が見つかつたから、御参考までに採録する。

二つのほことん

—

有権者諸君！

私が、唯今司會者から御紹介に預りました、候補者の實弟であります。

豫じめ御断り申上げて置きますが、こゝに掲げてあります演題『我が兄を推薦す』は、司會者が勝手に定められたもので、その實、私は、今日こゝで、大ツびらに兄の棚おろしをやつて、有権者諸君の御参考に供すると同時に、盲蛇に怖ぢず、をこがましくも市會議員の候補者として名乗りをあげ、ガラにもなく政治界に首をつつこまうとする兄の不心得を喝破すべく、敢然、此の壇上に、五尺の短軀を運んだ次第であります。

有権者諸君！

その昔、某の國務大臣は、議會の席上、『枚擧に違あらず』を『ボツキヨに違あらず』とよみ、『矛盾』をホコトンとよんで、満場を笑倒せしめたといふ事ではありますが、私は、今度の歸省に際し、より以上のホコトンを、二つまで、實際に體驗したのであります。

ホコトンの第一は、政友會、憲政會は勿論、既成政黨派に何等關係のない素人——地方の政治問題などに、一度も口を出した事もない、全くの門外漢である長兄を、事もあらうに、市制を布かれて、初めて選ばれる市會議員に擔ぎあげようといふ、有志諸君の脱線ぶり、たとひ再三辭退の末とはいへ、それではやつて見ませうかと、圖々しくも立候補を聲明した長兄の、果て知れぬ向ふ見ずであります。

第二は、政治は素より、子供の事以外——それも極めて小範圍の——何一つ知らない此の私、然かも、兄の立候補に大反對を唱へ、極力之を諫止し、口を極めて之を罵倒した私を、今日の政見發表演說會に拉し來つて、兄の爲めに推薦演說をさせようといふ、有志諸君の無鐵砲さ加減であります。

二

私は考へました。

バカ／＼しいにも程がある。誰がそんな處に出てやるものかと、一度はキツパリと斷つたもの、もと／＼臍まがりの私である。つむじまがりの私であります。黙つて居たら推薦者諸君の熱誠に動かされ、過つて兄に投票される御仁がないとも限らぬ。

もし萬一、それが爲に、兄が當選の憂き目を見るやうな事があつたら、それこそ天下の一大事である。

『之は一つ考へ直して、長兄が、今日の政治界に、首をつツ込む資格のない男だといふ事實を、具體的に市民諸君に訴へてやらうと思ひついて、

『それでもいゝか？』と申しますと、兄は、

『棚おろしでも何でもやれ。兎に角、新聞にあれ程大々的に書かれたのだから、面だけでも出してくれ。』と申します。推薦者諸君も、それでよいと言はれます。

『それ程價値のある面なら……』と、かうしてノコノコ出ては見ましたものゝ、何しろ、臍の緒切つて始めての處女演説であります。之が子供の話なら、千や二千の聴衆は何とも思はないが、サーベルを下げた警官諸君の監視の下にお喋りをするとなると、知らず／＼に手が慄へる。足がふるへる。さらでも小さき此の胸は、見合ひに引き出された花嫁のやうに波うつて居ります。多少の野次は、心膽練磨の藥と有難く頂戴致しますが、さき程のやうな野次り倒しは、同郷のお情け、平に御容赦を願ひたい。

私は、上京以來、約三十年になります。子供の友達として終始した私は、新聞社に於いては、依然として一陣笠に過ぎないが、社會的には、之でも一個の有權者として、或ひは衆議院議員の選舉に、或ひは市會議員の選舉に、その都度、多大の期待と囑望とを以て、清き一票を、自ら信する候補者に投ずるの光榮を有しましたが、選舉終りて後數月、選ばれたる選良諸君の行動を見る毎に、私は、啞然、呆然として、殆んど言ふ處を知らなかつたのであります。

申すまでもなく、政治は權力であります。

従つて、政黨政派の目標が、常に政權の獲得である以上、甲の政黨、乙の政派を地盤として、

その力により、當選の榮を擔はれた議員諸氏が、多少の權謀術數を弄する事は、或程度までは止むを得ない事かも知れないが、それも程度問題であります。

もし、公けの權力を悪用、濫用して、苟くも、私利私慾を貪るが如き徒あらば、宜しく鼓を鳴らして、之を排撃すべきであります。

にも拘らず、是等選良諸君の多數は、在野時代、徹頭徹尾、政界の革新と、政治道德の確立を高唱せられたる同じ舌を以て、平氣で、酒々として、黨勢の擴張、利權の獲得の爲に、鐵道の敷設、築港、治水の好餌を以て、醇朴なる地方民を釣らんとするの事實を見聞して、私は、たゞ一枚の舌を、二枚にも、三枚にも使ひわけて、そこに何等のホコトンも感ぜざる、是等選良諸君の厚顔無耻に敬服すると同時に、その便利至極の舌が、今日の所謂政治家の、最大の武器である事實を、承認せざるを得ないのであります。

所がです。

私の兄は、幸か不幸か、天にも地にも、一枚の舌を、一枚として使ふ以外に、藝當のない男であります。

不義、不正に對する公憤のあまり、時々毒舌を弄する事はあるかも知れないが、一身一家の利害、得失によりて、一枚の舌を二枚にし、三枚にするやうな、そんな融通の利く男ではないのであります。

私が、頭から、彼を、今日の政治界に頭をつツ込む資格のない男、所謂選良の候補者として、最も不適任者であると斷ずる理由の第一であります。

三

第二の理由は、彼が、東京の市會議員諸員のやうな、極めて丈夫なる齒と、巨大なる咽喉と、驚くべき消化力に富める胃袋の所有者でない事であります。

新聞紙の傳ふる處によれば、東京の市會議員諸君のうちには、砂利や鐵材をボリ／＼噛み砕く、恐るべき丈夫な齒の持主があつたといふ事であります。

中には、あの厩然たる水道の鐵管をさへ、ペロリと嚥下する、偉大なる咽喉の持主もあつたといふ事であります。

最近には、大震火災の復興材料として、外國又は内地から寄贈されたトタンブリキや、木材や、罐詰類を丸呑みにした、驚異すべき胃袋の持主を、市會議員のうちに發見したと、報じて居る新聞紙さへあります。

ところが、兄は大の弱蟲で、到底そんな山男のやうな藝當を持ち合せない平凡人であります。彼の齒は、僅かに、鹽煎餅やビスケットを噛み砕く位が關の山で、彼の咽喉は、數本のウドンを嚥下するに止まり、彼の胃袋は、常に胃痙攣に悩まされるの悲境にあります。

私が、理想選舉の名に引きずられて、政治の渦中にまきこまれんとする彼の首根ツこをおさへて、極力之を引留めんとする、第二の理由であります。

第三の理由は、彼の足が、權門富貴に向つて常に疎遠であり、無關心であり、彼の瘦腕が、私利私慾に動くべく、あまりにぎごちなく、鈍的である事であります。

御承知の通り、今日の政治家——殊に國會議員の御歴々のうちには、朝に議政壇上にたちて、元老無用論を絶叫したその足で、暮夜、元老、重臣の邸宅に伺候して、彼等の御機嫌を取り結ぶべく、千里の名馬にも比すべき駿足の持主さへあります。

中には、片手で資本家と握手し、片手で労働者と握手し、兩者の懐から、たんまりと阿堵物をせしめる、屈折自在の腕の持主さへあります。

ところが、兄は不幸にして、さうした稀有の駿足を有せず、たこのやうな便利な手腕を持つて居ない凡々であります。

四

かう論じて來ると、彼は、まるで、三文の價値もない男の様に思はれて、聊か氣の毒な感じもいたしますが、併しそれは今でも、政治家と比較しての話で、人間として、一個の公人、一個の私人としての彼には、また、私などに眞似のできない美點が多々あるのであります。

彼は、嘘をつかない眞正直の男であります。

どうかすると、馬鹿正直の譏りは免れないかも知れないが、兎に角、曲つた事の大嫌ひな、直情徑行の男であります。

彼の學問は、中等教員の程度にとどまつて居りますが、理財と數學とは、彼の最も得意とする

處であります。

彼は、誠心誠意の人であつて、頼まれても、悪い事のできない男であります。

彼は、酒をのまない。煙草も吸はない。自分の細君以外に、全く異性を知らざる、否、知らうともしない朴念仁であります。

この一事だけでも、彼が、到底、今の所謂政治家諸君と肩をならべて、待合に、料理屋に、共に濁波をあげる事のできない男だといふ事が、お分りになつて戴ける事と存じます。

五

かう申上げると、諸君或ひは言はん。お前の語る處、それは主として東京の話ぢやないか。

成る程、東京の市會議員は、さうかも知れないが、鶴岡市はまるで違ふ。

わが鶴岡市は、舊莊内の首都で、古來、武士道の淵藪といはれた酒井家の城下である。殊に名君忠徳公が、君民一家の大理想を標榜して、王者の道に終始して以來、東洋政道の理想境として、諸侯美望の的となつた莊内である。

その城下であつた鶴岡が、新たに市となつて、はじめて選ぶ名譽の選良に、砂利やトタンを食つたり、鐵管をのんだり、二枚舌を使つたり、權門富貴に阿り、貧乏人を食ひ物にするやうな、所謂札つきは眞ツ平だ。

馬鹿正直が、面白いぢやないか。

煎餅ポリ／＼が、愉快ぢやないか。

融通のきかない一枚舌が、罪がなくて結構ぢやないか。

細君以外に異性を知らない、その朴念仁が何よりぢやないか。吾々は、そこを買つて選舉してやるんだ、といはれるならば、僕また何をか言はんやです。

あつても、なくても、どうでもいゝが、腹の眞中に臍がないと、何だかしまりがないうらに思はれる。その臍の役目ぐらゐならば、兄も立派に勤め了せる事と思ふからです。

もしその意味で、精進向上の門出ともいふべき第一期の鶴岡市會に、長兄の人物が必要だとあらば、私もまた、市民の一人として、双手をあげて賛成をいたします。願はくば、嘘の言へない、融通のきかない、悪い事のできない、ない／＼づくしの朴念仁を、市民一致で推薦していただき

たい。改めて、弟の私からも願ひする。

實にバカ／＼しい演説である。諸君も之まで、こんなバカ／＼しい應援演説を、一度もきかれた事がないであらう。

私もまた、こんなバカ／＼しい演説をやつた事はない。お互の迷惑は相殺として、始めから終りまで、かく多數の來會者諸君が、一言の野次をも飛ばさず、嬉々として御靜聽を賜はつた御好意は、長兄の當落に拘らず、長く銘記して忘れないつもりであります。謹んで諸君の御健康を祈ります。

東京の手、日本の手

一

御紹介に預りました、安倍季雄であります。

一個無名の童話家である私が、畑違ひの選挙應援演説をやらうといふのであります。お聴きになる皆様も御迷惑だらうが、私も迷惑至極であります。

正直に白状致しますが、私はY君の友人として、今度ぐらゐ、肩身が狭く感じた事はないのであります。御承知の通り、Y君は操觚界に於ける大元老で、私のためには大先輩であり、同時に、後進生のために、最も深切なる指導者として、私共が、常に、心から敬服し、尊敬して居る人格者であります。

そのY君が、今度、一身の利害得失を度外視して、敢然、市會浄化の陣頭に起たうといふのであります。『こんな時の友達だ、何を措いても、犬馬の勞を執るべき大切な場合だ。』と思つて、遮二無二、追取り刀でかけた次第であります。悲しい哉的が違ふのであります。

私も、講演の數では、敢へて人後に落ちない積りだが、私が、日頃取扱つて居る聴衆は、大部分、諸君より、もそつと可愛い、目鼻立のくるくるツとした、無邪氣な少年少女か、青年男女であります。そして、それ等の大多數は、特に私の話を聴かうと思つて來る篤志の聴衆であります。所が、諸君はまるで違ふ。

私の顔はおろか、名さへ聞いた事のない、路傍の人だ。

眼あては伊藤痴遊氏であり、長島隆二氏であり、大河内傳次郎氏である。

私の話なんか、テンデ眼中にない人達である。昨日も小學校で話したが、全然黙殺だ。吾笛ふけども汝等踊らず、——私がいくら聲を囁らして熱辯をふるつても、聴衆が波に乗つてくれないのである。的が違ふからであります。

私は、よつほど、昨日限りやめてしまはうかと思つたが、決戦の日は明日に迫つて居るのだ。

天下分け目の關ヶ原を明日に控へて、

『どうも私の弓勢では、役に立たんから失敬するよ』とは、いくら何でもいひかねる。大童になつて、奮闘苦戦をつゞけて居る友達の手前、義理として言へる言葉ぢやない。

止むを得ず、此の演壇にかけのぼつた所以であります。

話はまづくとも、嘘をつかないのが、私の講演モットーであります。

殊にこゝは、大宗寺の閻魔堂であります。

後には、閻魔大王が、大きな眼を光らして控へてござる。うっかりした事を言つて、諸君の見る前で、舌でもぬかれては大變だから、嘘はつかない。暫く御静聽を煩はしたい。

二

私は、昭和三年五月廿六日、澄宮殿下が、學習院初等科を御卒業遊ばされた御祝ひを兼ねさせられ、十一方の皇族若宮様方と、六年間、御薫陶を受けさせられた教官方を霞ヶ關の離宮に御召しになつて、お茶の會をお聞きになつた際、召されて光榮の童話を申上げたのでありますが、その

時、私が申上げたお話は、ベカスツリーニといふ伊太利の勇士の美談で、童話界の大元老久留島武彦氏が、方々の小學校で話して居られる、極めて愉快なお話であります。

簡単に筋だけ申上げると、伊太利のフロレンスの炭坑夫に、ベカスツリーニといふ男がありました。

世界大戦に従軍して、軍曹に陞進したが、或時、軍司令官の命を承け、坑道の作業中、一兵士が、禁を犯して煙草をのんで、その吸殻を谷底に投げ棄てたが、それが、過つてダイナマイトの箱の上に落ちました。

それが導火線にうつつて、今正に破裂せんばかりになつた時、はじめて発見したのがベカスツリーニであります。

『危い！ 危い！ 皆逃げる！』と絶叫し、三十人の部下が、高麗鼠のやうになつて、逃げ行く後姿を見守りながら、今正に破裂せんばかりのダイナマイトの箱を両手に捧げ、谷底めがけて力限り投げたが、間一髪、ダイナマイトは爆發して、ベカスツリーニは瀕死の重傷を負ひ、病院に運ばれたが、醫員の手厚い看護により、二ヶ月ばかりで、どうやら看護婦の肩につかまり、病院

内を散歩する事ができるやうになりました。

健康は恢復したが、見るかげもない不具者になりました。

両眼はつぶれ、兩耳はもぎとられ、右は二本、左は一本を残して、七本の手の指は、全部なくなつてしまひましたが、その三本の指を動かして、ベカスツリーニは、巧みにタイプライターをたゞき、詩歌や、小品文や、小論文を作成し、それを新聞雑誌に發表して、それが活字となつてあらはれるのを、無上の樂しみとして居りました。

過去二十年間、炭坑夫として働き通したベスカツリーニは、兵隊として入營するまでは、全くの無學文盲であつたが、出征中に奮發して、ABCから勉強し、一かどの文學者になつたのであります。

その詩や、歌や、小品文を、皇太后陛下が御覽になり、御感賞のあまり、皇帝、皇后と御揃ひで、拜謁仰付けられる事になり、ベカスツリーニは、病院長につれられて離宮に參内いたしました。だが、その席上、皇帝陛下には、特に、ベスカツリーニの手をお握りになり、

『此の手伊太利の手！』と仰せられ、更に、御手づから名譽の勳章をベカスツリーニに賜はり、

其の肩にお手を置かせられ、

『此の身體、伊太利の寶物、大切にせよ。』と仰せられました。

續いて、皇后陛下、皇太后陛下よりも御懇の御言葉を賜はり、無上の面目を施して退出しましたが、それツきり、ベカスツリーニは、口をきかなくなりました。

病院長は、感激のあまり、精神に異状を呈したのではないかと心配したが、翌朝になると、ベカスツリーニは、病院長を呼びにやり、

『昨日、陛下が、私の此の汚ない手をお握り下され、此の手伊太利の手と仰せられ、私の肩に御手をかけさせられ、此の身體、伊太利の寶物と仰せられました。私には、どうしてもその意味がわからなかつた。』

此の手は私の手だ。此の汚い手が、どうして伊太利の手か。

無學文盲、何一つ取柄のない私のこの身體が、なぜ伊太利の寶物か、それが少しもわからなかつたのです。

私は、一晩中考へました。そしてヤツと分りました。

院長、私は、今まで此の手を自分の手だとばかり思つて居ました。だから粗末に扱つて、悪い事にばかり使つて來ました。それが大變な間違ひでありました。

此の手は、自分の手であつて自分の手ではない、伊太利の國からお預りした手だ。

此の手を、善き事、正しき事のみに使かせ、世界人類の爲めに使用する時に、此の身體ははじめて伊太利の寶物になる。——皇帝陛下の御言葉は、さういふ意味ではなかつたでせうか？』といふと、病院長は手を拍つて、

『君の眼は、兩方ともつぶれたが、君の心の眼は、千里をみとほす明がある。偉い／＼。』とほめました。

『それならば、此事の事を、一刻も早く伊太利の子供達に知らせたい。私を小學校に連れて行つて下さい。』といつて、即刻、自動車を驅つて、ローマ第一の小學校に押しかけ、二千人の子供の前に立つて、

『皆さん、手をお出し下さい。』

出しましたか？

その手伊太利の手！

皆さん、その手を胸にあてゝ下さう。

あてましたか？

その身體、伊太利の寶物！

大切にして下さい！ 終り！』

ベカスツリーニは、大きな聲でかう言つて、演壇から下りました。

その後で、校長が、ベカスツリーニの言葉の意味を敷衍してきかせました。始めて諒解した子供達は、それ以來、まるで生れ更つたやうな、立派な子供になつたといふお話。

三

こゝで、私は、改めて諸君にお尋ねしたい。

二本の手を持つて居る者は、伊太利人だけか？

ベカスツリーは伊太利人だ。

だから、ベカスツリーニの手は、伊太利の手であつた。
諸君も、私も、日本人だ。

日本人の此の二本の手は、どこの國の手か、どこの國からお預りした手か。

此の手を、善き事のための爲めに、正しき事のための爲めに働かせる時、我々の身體は、どこの國の寶物になるか。

これは、單なる子供だましの言葉とのみ、聞き流すべき問題ではない。

敢て問ふ。

諸君の手は、今まで、果して、善き事のみに使はれ、正しき事のみ働かされたか？

過去は問はず、今日、今日以後、諸君に果してそれだけの自覺と、決心とがあるかどうか。

試練的は、今、諸君の眼前に横だはつて居るではありませんか。

東京市を明るくする爲めに、帝國の首都を代表する市會議員として恥かしからぬ、立派な選良を選舉すべき大切な日は、明日に迫つて居るではありませんか。

小にしては四谷の手、東京の手、大にしては日本の手、その手を最も有効に使用すべき日は、

明日に迫つて居るではありませんか。

諸君の手の動きによつて、東京市が、明くもなれば暗くもなる。

もし、諸君の手が、情實の爲めに動き、黄金の爲めに左右されて、市會議員を職業とする徒輩

——議員の肩書を利用して、自己の口腹を充たさんとするガリ／＼亡者に、投票するやうな事があつたら、折角の市會淨化は、形なしになる。

諸君の中には、Y君の政見に對して、異議を挾まれる方があるかも知れない。

併し、それは、抑も末の問題だと思ふ。

今回の選舉に起つた二百四十餘人の候補者は、皆、堂々たる政見を發表して居るのである。

否、今回ばかりではない。前回の市會議員、砂利を噛み、板舟を咬り、京成電車のレールを嚙下せんとした市盜の輩さへ、猶、堂々たる政見を發表して、諸君を瞞着し、榮譽ある市會議員の肩書を勝ち得たのではないか。シトウを馬鹿にして居るなんて、洒落どころではない。

四

私は思ふ。

政見なんか第二でよい、第三でよい。今回の市議選舉の第一眼目は、市會の淨化だ。

市會の淨化といふ事は、石炭酸や、石灰をまく事ではない。八十四人の市會議員みんなが、悪い事をしない人、嘘をつかない人、東京市ならびに東京市民の爲めに、本當に働く人のみであればそれでいゝのだ。

その八十四人の二十一分の一を、四谷區の有權者諸君が、選出する義務があるのだ。

その日は明日だ。

諸君の手——小にしては四谷、東京、大にしては日本の國から預つたその手を、最も有意義に働かせる日は、正に明日に迫つて居るのだ。その理想的人物として、私は、衷心からY君を諸君に推薦したのであります。

私は切に諸君の良心に訴へる。否、諸君に懇願する。

どうぞ諸君の清き一票を、明日、Y君の爲めに與へて戴きたい。

Y君も人間だ。缺點もあらう、政見には多少の異同もあらうが、Y君は嘘を吐かない人だ。強

い事をしない人だ。職權や肩書を悪用して、自己の慾望を充し、私腹を肥やすやうな曲事、悪事は、頼まれても出来ない人だ。

そこにY君の人格があり、Y君の價值があるのです。

Y君が市會に出たら、あらゆる問題が、スラ／＼と解決されるとは、私も言はない。言つたら閣下様に舌をぬかれる。

其の代りY君は、いつ、いかなる時でも、東京市會にありて、太陽、電燈の役目をつとめる人だといふ事は、明言し得る。

市會の淨化は、東京市を明るくする。その第一の役目を勤める最上の候補者として、Y君を推薦したのであります。

高座から甚だ失禮ではありまするが、東京市のために、四谷區の爲めに、否、日本の爲めに、切に、諸君の清き一票をY君に投ぜられん事を、懇請して止まざる次第であります。

狙つた的を外すな

一

たとひそれが、五分でも三分でも、矢が的から外れたら、弓の上手とはいはれない。
『もう少しだ、もう少し右によつたら、金的だつたがなア』なんて、口惜がつた處で、あとの祭りだ。

どんな上等の器械をつかつて、ピントが外れたら、其の寫眞は物にならないやうに、演説も同様だと思ふ。何々大學教授、何々博士、肩書がいくつあつたところで、そんなものは何の役にもたゝない。

講演、演説のコツは、聴衆の心を捉へる事だ。こゝをと狙つて、うち込む弾丸が、相手の胸にドーンと來なかつたら、どんな巨砲でも、一箇の空弾に過ぎない。

政談演説や學術講演は、吾々の専門以外だから姑く言はず。通俗講演、お伽講演には、特に此の『的をきめる』といふ事が大切だ。ちよつとでも的が外れたら、どんな偉い人の、どんな立派な講演でも、不成功に終る事請合ひだ。

佛者が、『人を見て法を説け』といつたのは、至言だと思ふ。

二

政談演説には政談演説のコツがあつて、吾々素人には、狙ひのつけようもないが、要するに、それを聴かうと集まつて來る聴衆は、反對黨か、味方か、中立か、此の三種を出ない。

しかも彼等は、聴かざる前に既に聴いて居る人々だ。知識の程度も、略ぼ平均して居るものと見て差支へない。だから、彌次の入りさうな要點々に釘さへ刺して置けば、あとは、臨機應變のウキツトで、何とでもなる筈だ。辯士が一かどの雄辯家であり、相當、舞臺度胸がすわつて居さへすれば、さまで恐ろしい事はない様に思ふが、爺さん御座れ、婆さんござれ、百姓、商人、會社員、官吏、甚しいのは小學生まで狩り集めて、さアお話を……といはれる通俗講演會には、

ほとく泣かされる。

一體、どこに的を置いていゝのか？ どの程度を、標準としていゝのか？

あんまり碎けた、通俗的な話をしたら、知識階級の人々が、ばかにして居ると怒るだらうし、専門的の學術講演になると、無學の爺さん婆さんに、直ぐ欠伸を連發される虞れがある。

子供が居れば、尙更話し悪い。進退兩難どころか、全く途方にくれる外はない。

こんな時に、あて込み澤山の初心者が、

『婦人の經濟的獨立と、婦人の參政權獲得とは……』などと、得意になつて論じたてようものなら、それこそ自繩自縛、どうにも動きがとれなくなる。

的がはずれた、といふのは其の事だ。

三

まづ講演、演説を頼まれたら、それをひき受ける前に、

A 聴衆の種類と知識の程度

B 會場の種類（學校か、公會堂か、劇場か）と豫定人數

C 相辯士の氏名経歴、年中行事的に連続した集會であれば、前回の辯士はどんな事を話したか、其の概要

D プログラムの大體と、自分に與へられる時間

先づ之だけを、是非知つて置きたい。その上で、演説の内容をきめる事だ。

専門の講演者は別として、アマチュアには、之だけの用意は是非必要だ。

的がきまれば、もう安心、心に餘裕ができれば、あとはウキツトでどうにでもなる。

聴衆が、雑多なれば雑多なほど、的のレベルは低い方がいゝ。

まづ、二分か三分といふところ。

それを、適切な比喩と、豊富なる引例で生かして行くのが、通俗講演のコツだ。

お伽講演で注意すべき事は、児童と環境との關係だ。

概して、都會の子供は、地方の子供に比べて感傷的だ。

それが、東京、大阪のやうな、大都會になればなるほど、末梢神経が過敏に動く。

同じ話をするにしても、都會と地方とでは、ピントに手加減をしないと、往々にして失敗する。信州松本で、南北戦争のエピソードを、子供に話した事がある。師範の附屬小學校であつたと思ふ。

十五歳になる少女が、銃刑ときまつた兄の生命乞ひをしようと、ワシントンのホワイトハウスに、大統領リーカーンを訪ねるといふ、感激的な童話だ。

友達の爲に、喜んで死なうと決心した健氣な青年が、涙ながらに遺書を認め、最後に、

『では御丈夫で、いつまでも幸福に暮して下さい。あなたの息子、御身の兄弟が、眼かくしをせず、兩手を廣げて、勇士の如く死んで行くのを、せめてもの心慰にして下さい。……かうしてひとり寂しく營倉の中に坐つて居ると、懐かしきお父さんの姿や、可愛い妹の顔が、眼の前に見えるやうです。泣かないで下さい。そして、どうぞ、もう一度、左様ならをいはせて下さい。』と筆を結んだといふ處まで來ると、滿堂の聴衆は、涙をボロ／＼こぼして泣いて居た。

『非常にいゝお話ですな。私も思はず泣かされました。』と、校長も挨拶された位であつた。

これに勇氣を得て、翌日は、松本から三里ばかり離れて居る神林といふ村の小學校で、同じ話

をした。

二度目だから、話も前日より遙かによく出來たと思ふにかゝはらず、生徒は、いづれも、ポカインとして聞いて居る。肝腎のクライマックスの所へ來ても、涙をこぼす者は一人もなかつた。

私は、何となく物足りなく感じたが、同時に、都會と地方とでは、これだけ子供の感受性に相違がある事を痛感して、話を子供に聽かせる時に、都會と地方によりて、話の選擇に、話し方に、適度のプレミアムをつけなければならぬ事を自覺したのであつた。

四

もう一つは、山の子供に海の話をして、失敗した苦い體驗だ。

是れも信州に出かけた時の話だ。信州の小學校では、野球が非常に盛んである。郷村から講演にきゝに來る子供達は、いづれもバットとボールを持參して、講演會が終るとマツチをやつて歸る。

それを見つけた私は、該博？なるわが輩の野球知識？を示すは、此の時にありと、丁度ジ

ヤイアントの御大マグローが來朝した間近かであつたから、雑誌の愛讀者を代表して、世界的大選手と握手した一節を、ま、くらにふつて話を進めると、果然、果然、聽衆の瞳は、星の如く輝いて來た。

しめたと思つた私は、直ぐ話頭を一轉して、

『そのマグロー君が、私に話してくれた實話の一つだ。』と前置きして、難船の話をする、今まではりきつて居た子供の顔色は、急にグツソリしてしまつた。

オヤ／＼と思つた時は、もう遅かつた。信州の子供には、海のご概念がないのだ。逆まく怒濤が、或時は山と高まり、或時は千仞の谷と深く……なんて、いくら誇張してきかせた處で、所詮は馬の耳に念佛、唯だ、ボカーンとして聞いて居るだけだ。

私は、啞然として、どう此の話を結ぼうかと、壇上で思案にくれたのであつた。

山の子供に海の話はいけない。環境と子供の關係を無視した童話が、成功しない實例として、此の失敗談を告白する。

翌日は、早速方針をかへて、犀川を背景に、濁流に押流された鐵橋の番人と、白痴の少年の話をし

たら、果して大受けであつた。

無論、その聽衆は、尋常三年以上のヒロイツク・ベリウドで、其の話が、『空想や、理想を、この世界に誘導し來らんとする。欲求の發現を許す現實世界』に立脚した爲めである事は、申すまでもない。

童話家の應援演説

一

童話界の元老岸邊福雄氏が、親友古島一雄氏の政見發表演説會に、應援辯士として出席した時の話である。

昔から、東京の市部では、衆議院議員の選舉といふと、其の在野時代と與黨時代とを問はず、不思議と、政友會の旗色が悪い。財産もあり、學識もある金ピカ候補者が、却つて、貧乏を賣物の非政友候補者に、食はれる事が珍らしくない。

殊に非政友時代の國民黨は、江戸ツ子の間に人氣があつた。國民黨は、後に革新俱樂部と改稱、間もなく政友會に合併せられて、その大傘下に統一されてしまつたが、その頃の國民黨は、政友會の爲めに、大の苦手であつた。

今は、選舉法の改正で御法度になつたが、まだ公然、戸別訪問が許された時代だ。選舉民に、最もきゝめがあつたのは此の手だ。

頼まれたら、後へは引かぬ江戸ツ子氣質、そこを見込んで、

『頼むよ！』と一言。

『ようがす。』と、ふんぞりかへつて、胸をポーンと叩いたが最後、九分九厘まで大丈夫と思つて居た地盤が、一夜のうちに覆されて、まんまと中原の鹿を逸した苦い經驗を、幾度も嘗めて居るだけ、政友系の國民系に對する警戒ぶりは、非常なものであつた。

二

時は大正十三年五月だ。第十五回目の總選舉が行はれて、古島一雄氏は、革新俱樂部から推されて、東京市部第八區から立候補した。

相手の競争者は、憲政會の作間耕逸、政友會の矢野鉉吉、他四人、三人の定員を七人で争はうといふのだから、競争は、勢ひ激烈とならざるを得ない。

尤も、當時は護憲派といつて、與黨の政友本黨を向ふにまはして、憲政、革新、政友の三派が、表面上、手を握つた形にはなつて居たが、愈當落を争ふ段になると、敵も味方もあつたものではない。金の蔓に縁の遠い古島氏は、それだけ、最初から、惡戰苦闘を覺悟しなければならなかつたのである。

理想選舉の第一武器は、言論戰だ。それには、是非とも雄辯家を演壇に送らねばならぬ。

古島氏は、早速、親友岸邊福雄氏の處へやつて來た。

童話家に政談演説、まるで畑違ひの注文である。無論、他の人の頼みなら、岸邊氏の事だ、一言の下に斷つてしまつたに違ひないが、古島氏は、莫逆の友であり、議政壇上、有數の人格者である。

『此の人を、議會から失ふ事は、日本の爲めにも大きな損だ。』と考へた岸邊氏は、言下に快諾の旨を答へたが、さて何をしゃべらうかといふ段になつて、遠がの岸邊氏も、少からず當惑した。

これが、家庭會とか、通俗講演會とかいふならば何でもないが、政談演説、——しかも無二の親友が、男になれるかなれないか、といふ關ヶ原だ。迂濶な事でも言はうものなら、應援どかるか

却つて、どんな邪魔にならうも知れぬ。

十五分か、二十分の童話放送にさへ、十日も、二十日も苦心する岸邊氏だけに、

『こりやとんでもない事を引受けてしまつたわい。』と、ほと／＼思案にくれたのである。

併し、窮すれば通ずで、考へて／＼、幾日も考へぬいたあげく、岸邊氏は、ヤツと、一條の血路を見出してホツとした。

ホツとした時には、既に、肝心の演説會が目睫の間に迫つて居たのである。

三

愈當日となつた。

『今夜の眞打は君に頼むよ。今夜の聴衆の大部分は、政治家ならぬ君が、どんな演説をするか、それを聴きに來て居るのだからね。』と、とう／＼ドン尻にまはされた岸邊氏は、司會者に紹介されて演壇に立つた時、曾ておぼえぬ胸のときめきに、童顔を赤くした。

『唯今御紹介を受けました、岸邊福雄でございます。』と、口をきつた岸邊氏の口調は、いつもと

はまるで變つた、謹嚴莊重なものであつた。

演説といふものは、必ず「滿堂の諸君」ではじめられるものと承知して居た聴衆は、やゝ意外のおもゝちで、演壇の辯士を見上げた。

『私は政治の門外漢であります。だから、政治上の問題は、まるで盲目も同様であります。

知らないものが知つたかぶりをすれば、必ず嘘になります。私は嘘をつく事は大きらひでござりますから、政治の事は一切申上げない積りであります。

併し、古島一雄は私の親友でござります。古島の性格や、人格は、誰よりもよく知つて居るつもりでござります。だから私は、今度、衆議院議員候補者として立つた古島一雄といふ人間は、かういふ人物でござりますといふ、嘘偽りのない處を申上げるつもりで、こゝに參つたのでござります。』

聴衆は一齊に拍手し、喝采した。

岸邊氏は、しめたと思つた。

思つたが、それを色にも現はさず、おもむろに咳一咳。

『まことに畏れ多い事ではござりますが、日本國民が心から敬愛し奉る攝政宮殿下と、久邇宮良子女王殿下との御成婚の御儀式も芽出度く相濟み、千秋萬歲、ゆるぎなき日本國の礎が、更に一段の重みを加へ得ました事は、御同様、慶賀に堪へざる次第でござりまする。』

事、皇室に關する問題だけに、聴衆は鳴りを鎮めて謹聽して居る。

岸邊氏は、再び咳一咳して、愈謹嚴なる態度で、兩殿下の御婚約が、非公式に發表された當時の事情から、元老某々の建言が外間に漏れ、意外なる風説が流布せられ、天下の視聽を聳動せしめた次第を演説し、久邇宮殿下から、某元老に賜はつたと傳へらるゝ御返書の内容から、杉浦重剛翁が、身命を擲つて最後の御奉公を思ひたつた顛末、ひいては宮中、府中の形勢から、元老建言の眞意が奈邊にあつたかといふ事まで、事も細かに陳述し、これぞ、國民全體の頭にかゝる大問題である。苟くも皇室を思ひ、國家を憂ふる者の、一刻も坐視すべからざる重大事件であると信じて、古島氏が眠食を忘れて東奔西走、政界の巨頭や元老、大臣などを歴訪して、ひたすら圓滿なる解決に努力した事、至誠純忠の杉浦翁が、古島氏の手を握つて、涙をホロ／＼とこぼしながら、國家のために、古島君頼むよといはれた事、其の結果、内務省ならびに宮内省から、前後して

「兩殿下御婚約に關して、世上彼是れの取沙汰あるも、事實無根、御變がへ等の義は、もとよりあり得べからざる事である。」と發表され、國民一同が、ホツと安堵の胸を撫で下した始末をば、例の淀みなき雄辯で陳述し、

『此の事が確定、發表されて間もなく、久邇宮殿下から、古島に、晚餐を賜はるといふ、有難い御沙汰がありました。』

古島は、思ひがけない光榮に感激いたしました。生憎當日は、三黨首會合の日にあたり、古島は、其の世話役を仰付かつて居る關係上、拜辭の爲め、其の前日、宮家に參邸いたしますと、殿下には、特に、古島に拜謁仰付られ、

「段々の骨折り、過分に思ふ。」といふ、有難い御言葉を賜はつた上、

「明日は、三黨首會合の世話役を勤めるとの事、御苦勞である。今後とも、國家の爲めに、十分盡して貰ひたい。」と仰せ下されました。重ね／＼の光榮に感泣しつゝ、古島は、御前を退出したのであります。

親子の情には貴賤はない。まことに畏多い事ではござりますが、殿下の短い御言葉の中には

良子女王殿下の御父君として、無限の御恩愛と、御満悅の意味がふくまれて居たと拜察いたしました。する事は、決して不敬ではないと思ふのでござりまする。

殿下から晚餐を賜はるといふ事は、臣下として無上の光榮である。にも拘らず、國家の爲めにそれをさへ拜辭した古島の心情を、御推察遊ばされて、

「今後とも國家の爲めに十分盡して貰ひたい。」といふ、御言葉を賜はつたのであります。

其の後、古島の娘が死んだ時、久邇宮殿下には、誰ら／＼お聞き遊ばされたか、わざ／＼、お使を以て、特に、見事なる花環を賜はりました。

古島は、殿下の御恩寵に對し、一死報國、上は以て聖恩に應へ奉り、常住坐臥、殿下の御訓諭を帶して、國家の爲め、粉骨碎身を天地神明に誓つたのであります。

諸君、私は政治の門外漢でありますから、政治家としての古島の政見、人望、聲價に就いては、諸君に語るべく何物を持たないのであります。唯私の知つてゐる事は、彼古島は、徹頭徹尾、誠實の人であり、皇室ならびに國家に對して、忠誠無二の人である事であります。

政治家としての手腕、策略は、多數の候補者の中には、古島以上の人があるかも知れないが、

陛下の御膝もと、帝都のまん中から選出する國會議員の中に、古島の如き、誠忠無二の人間が、一人ぐらゐあつてもよいと思ふのでありますが、如何でありませうか。切に皆さまの御考慮を煩はしたいのであります。』

かう言つて岸邊氏は、靜かに演壇を下りたのである。

拍手滿堂、一言の野次をもあびる事なくして、此の老練なる童話家の政治演説は、大成功裡に演了されたのである。

『第三位のどん尻ではあつたが、君のおかげで、ヤツと當選したよ。』といつて、古島氏が、白髪童顔の岸邊氏の手を、しびれんばかりに握りしめたのは、數日後の事であつた。

話材の活かし方

一

地方で、雑誌『雄辯』の愛讀者に會つた。その時、こんな注文が出た。

『雄辯』に時 掲載される『話材の掴み方と其の活かし方』は、非常に有益な文字であるが、さて之を實際に應用しようとする場合、どういふ風に活かしたらよいかと、いつも當惑する。何とか、もう少し簡単に、吾々が直ぐ利用し得るやうな材料を取扱つて貰へないだらうか——と。

私は答へた。

『それは無理だ。』

執筆者は、どこ／＼までも、諸君の参考に供するつもりで、體驗を土臺とした話材の掴み方と、その活かし方の一例を提供したに過ぎない。本當にそれを活かして使ふのは、讀者の働きであら

ねばならぬ。

或人が、海岸地方に旅行した時、珍らしい魚が獲れた。

焼いて食つたが、あまりうまくなかつた。

煮て食つたが、やっぱり旨いとは思へなかつた。

そこで、いろ／＼考へて、フライにして食べた處が、非常にうまくつたと話したとする。その話をきいた人が、同じ海岸地方の人なら、早速、その魚をフライにして賞玩する事ができるだらうが、海岸から何十里も離れた山の中で、聞いた事も、見た事もない魚を、どう料理のしようもないわけだ。

まして、自分は、材料も庖丁も持たずに、出来あがつた御膳の前にキッチンと坐つて、山海の珍味を貪り食はうといふのは、虫がよすぎるよ。』といつて、大笑ひしたのである。

私の『話材の掴み方とその活かし方』も、その範囲を出ない事を豫めお断りして置く。

二

私は、時々、正木不如丘博士の『臍の悲しみ』を、話のまくらや、伏線などに拜借する。無論その度毎に、

『此の話は、正木博士の書かれた本の中にあつたもので、皆さんもきつとお読みになつた事があると思ふが……』と、断る事にして居る。

これは、講演者の徳義である。他人の創作や、お話を、黙つて借用し、さも自分の創意であるかのやうに話して居る人が、世間には少くないが、これは是非やめてほしいと思ふ。

私が、どんな時に、それを拜借したかといふと、講演者が、自分の外に二人も三人もある場合、眞打は他にあつて、しかもそれが自分より先輩である場合、こんな風に活かしたのである。

『諸君、私は、最近、少閑を得て、箱根温泉に遊び、久しぶりで、ノンビリした氣持で、讀書に没頭いたしました。その中で、最も興味を感じたのは、正木醫學博士の「診療簿餘白」であります。

奇想天來、どれもこれも、ユーモアに富んだ、頗ぶる愉快な讀物ばかりであります。就中、私が最も面白く讀んだのは、「臍の悲しみ」の一篇であります。

或日、五十近い婦人が、七つか八つ位の女の子をつれて、博士の診察をうけに参りました。診ると、一種の脱腸で、臍が、チャボの卵程の大きさに腫れあがつて居ります。

「これは何でもない、一種の脱腸です。外科で手術すれば直ぐに癒ります。」と言ひ添へて、外科の専門にまはしましたまゝ、忘れるともなく忘れてゐると、或日、突然、外科の先生から、直ぐに来てくれといふ急ぎの電話、何かとかけつけて見ると、先日紹介してやつた婦人親子を前に置いて、先生が、苦虫をかみつぶしたやうな顔をして、黙りこくつて居ります。

「一體、どうしたんだ？」といふと、

「どうしたも、かうしたもないさ。君が、こんな分らずやの患者を紹介してよこすから、大迷惑をして居るんだ。」といふ。

すると、今度は、患者の母親がむきになつて、

「何が分らずやです。」

第一、先生も先生だ。こんな藪醫者を紹介して下すつたばツかりに、大切な娘の臍をなくなしてしまひました。一體どうして下さるんです？」と、まるで半狂亂で食つてかゝる始末です。

「まア、さう興奮しないで、事情を話して下さい——。」

一體、君、どうしたといふんだ？」と、外科の博士にたづねると、

「何でもないんだよ。手術があまり手際よく行き過ぎて、つまり、臍の痕跡がなくなつたといふわけさ。」

それを母親がむきになつて、娘の臍を抜き取つて下さいと頼んだ覚えはない。他日、此の娘が成長して、三國一の婿がねを貰つたとします。その晩、臍の行方不明が分つて、離縁にでもなつたら、泉下の亡夫に對して申譯がない。是非、臍をもと通りにして返せといふ強談判なんだ。

馬鹿々々しいにも程がある。」といふ申分です。

博士は、ふき出したいのをこらへて、外科の先生に、ドイツ語で、

「腹もたつたらうが、母親の身になつて見れば無理もない、何とかならないか。」と相談すると、

「何、ちよつと手術のやり直しをすれば、臍の形位は何とでもつくさ。」と答へる。

博士は、ヤツと安心して、

「おかみさん、心配しなくつてもいゝです。先生が、もと通り臍をつけてくれるさうです。明日

にでも、改めて連れておいでなさい。」と申しますと、母親も、ヤツと白い齒を見せて、「有難うございます。それでヤツと安心いたしました。」

……ねえ先生、萬が一、どうしても臍がつかないやうならば、私の臍をぬき取つて、娘の腹につけて戴きたい。くれぐれもお願ひいたしますよ。」と念を押して、母親はホク／＼もので、診察室を出てゆきましたが、廊下に出ると、娘が急に泣き出して、

「母ちゃん、いやよ／＼。母ちゃんのお臍、大きくて、黒くて、きたないんですもの……あたいのお腹に似合はないわよ。」といふ。

それをきいて、二人の博士は、思はず腹をかゝへて笑ひころげたが、数日後、その母親が、わざ／＼博士の宅にやつて来て、

「先生、おかげ様で、娘のお腹に立派なお臍がつかしました。有難うございました。」

唯だ心配なのは、今度のお臍は、ちツとも胡麻をたべないばかりか、觸つても、くすぐつたくなさうです。これも先生のお力で、何とかならないものでせうか。」と申したといふお話。

私は、それを讀んで以來、毎日湯からあがると、自分の臍を鏡にクロース・アップして、心の

中で、正木博士の名文を復誦する事にして居りますが、見れば見る程、人間の臍は愉快な存在であります。臍は、人間が、母親と最後の左様ならをした、大切な記念碑であると同時に、腹全體のしめく／＼りをやつて居る、無言の英雄であります。

試みに、人間の腹から臍を取去つたら、どんな恰好になるでせうか？

それを、想像しただけでも、吾々は、恐らく、ふき出さずには居られないでせう。臍を無用の長物などと考へたら、それこそ大きな間違ひであります。

こんな事を考へながら、或日、例の通り、浴槽で臍と對面の最中、營業局長からの急電で、

「君の郷里で講演會を開くから、是非出演して貰ひたい。」といふ命令であります。

私は、臍と電報とを交互に見くらべながら、「是れある哉臍！」と、叫んだのであります。

社中、俊秀の士雲の如し、何ぞ、訥辯の吾輩を要せんやだ。

にも拘らず、局長が、特に私の出馬を要請したのは、他でもない、吾輩に臍の役目をつとめるといふのだ。

「君の郷里で開く講演會だ。顔だけでも見せてやれ。」
あつても、なくても、よささうに思はれるが、腹の真中に臍がないと、何だか、身體全體に、しまりがないうやうに感ぜられる。

「局長だけに、さすが眼のつけ處が違つて居るわい。」と感心して、即日一行に加はり、久方ぶりで故郷に歸り、かうして、舊知の各位に見ゆるの光榮を得たわけであります。要するに今日の私の立場は、飽くまで臍であつて心臓ではない。豫め御諒解を願つて置く次第であります。』
これが、サンプルの一つである。

三

同じ話を、童話に應用したのが、『兵隊さんのお臍』である。(別項『兵隊さんのお臍』参照)
私が、それを新たに、聽かせる話に組立てようと思ひたつた時、子供を助けたその兵士の純情を、一層、効果的にする爲め、此の二人が、平生から、優しい母親思ひであつたといふ伏線に、此の話を借りたのである。

「なに、臍を豚に食はれた夢を見た？ それがどうしたといふんだ。あつても、なくても、どうでもいい臍だ。そんなもの、十でも二十でも食はせてしまへ！」

「おい、藤澤、きさまは、人間の腹に臍がいくつ附いて居るか知つてるか。十も二十も臍があつたら、腹中臍だらけになるぢやないか。——」

さては、きさまは、臍といふものは、どんな物だか知らないな。」

「知つてらい！」

腹の真中にあぐらをかいて、胡麻をたべてゐる、あれぢやないか。」

「馬鹿！」

そんな事を、きいてるんぢやないよ。

臍といふものが、どうして人間の腹にできたか、神様が、何の爲めに、腹のまん中に臍をつけてくださつたか、その理由を知つてるかつてんだ。

おい藤澤、きさまも俺も、生れ落ちるときから軍服を着て、鐵砲かついで、オ一、二イ、オ一
二イなんて、威張つてゐたんぢやないぞ。生れるまで十ヶ月の間、お母のお腹の中にエンコをし

てゐたんだ。

その間、俺達の臍の處に、長い管がついて居て、その端ッぽが、お母の體につながつてゐて、そこから御馳走を載いて、大きくなつたんだ。

十月たつて、オギヤークと生れた時、産婆さんが、其の管があつては邪魔だらうといふんで、鉋か何かでチヨキンと切つた、そのあとが、キュ／＼キュツのキュツと縮んで、かたまつて、胡麻をたべたのが、きさまの臍だ。俺の臍だ。人間の臍は皆それだ。

今になつて見れば、あつても、無くても、どうでもいゝものゝやうに思はれるが、大きな間違ひだ。

藤澤、よくきけよ。

臍は、そんな安ッぽい存在ではないぞ。臍はな、吾々人間が、お母と最後の左様ならをした、大切な記念物だ。いはば、お母の生形見だ。

人間は、我儘な動物だ。咽喉もと過ぎると直ぐに熱さを忘れて、少し大きくなると、自分ひとりで成長したやうな顔をして、お母のいふ事をきかない。ツベコベお母に口答へをする。そんな

事があつてはならないぞと、神様が、人間のお腹の眞ん中に、ちやーんとつけて下すつたのが臍だ。

人間は、お母の恩を忘れないやうに、時々臍を鏡に寫して、お母を思ひ出せ……。

俺は、この話を、正木不如丘といふ偉い博士の本の中で讀んで、成る程と思ひ、滿洲に来てから、朝晩、お母おぼに會ひたくなると、臍を鏡に寫して見る。

するとな、小指の先ほどしかない小さな臍が、だん／＼だん／＼大きくなつて、お母の顔に見えて来る。

お母さん、おはやう！ と、いふと、臍のお母も

おはやう……。

その大切な臍を、豚に食はれたぢやないか。

もしか、國で、お母が病氣でもしてゐるんぢやないかと思ふと、心配で／＼、ゆうべ一晩考へ明かしてしまつたんだ。

今朝もその事を考へて居たんで、きさまのいふ事が耳に入らなかつたんだ。失敬したなア。」

「おい川合！」

俺こそ失敬したなア……。

きさまの話をきいて、俺も急にお母の顔が見たくなつた。

よし、いゝ事をきいた。早速こゝで臍を出してお母に會ふから、きさま見張番を頼むぞ。」

かういつて、藤澤上等兵は、上着のボタンをはづし、シャツをひろげて臍を出し、さも懐かしさうに眺めて居る處へ、偶然通りかゝつたのは、公主嶺獨立守備隊第三中隊長倉本大尉——。

こゝで三人の會話になるのであるが、此の伏線を生かす爲めに、私は隨處に臍を點出して、臍と母親との關係を強調したのである。

『おい川合！』

俺のお母は、さう言つたぞ。滿洲は暑い所ださうだ、暑いからといつて臍を出して寝ると、風邪を引くぞ。氣をつけろよ。』(藤澤上等兵)

『うゝむ、臍はお母さんの生形見、大切な記念物か。なるほどなア。……中隊長も、早速之から隊に歸つて、三年ぶりで、懐かしいお母さんと對面しよう。』

それを、實物教訓で知らせてくれたのは、藤澤、お前の臍だ。

御禮を言ひたいから、もう一度、臍を出して見せろ。』(倉本中隊長)

中隊長が立去る。二人はぶら／＼歩き出す。圖らず眼にとまつた鐵橋上のホロノフ少年、後から突進してくる急行列車。間一髪、抱く。飛ぶ。息をふきかへす。事情を聽く。奉天に居る母をたづねて、ハルビンから歩いて來たときいて、

『オイ、川合、臍だぞう！』

『ウゝム、臍だなア、ロシア人にも臍があると見えるなア。』

オイ藤澤、きさま、いくらか金を持つてゐないか？』

『金？ 金、なにするんだ？』

『この母親思ひの少年を、汽車に乗せて、一時も早く奉天に送つて、臍に會はせてやらうぢやないか？』

『賛成！ それなら俺は、全財産を皆出すぞ。』

汽車は出てゆく、煙はこのる。

『オイ、ホロノフ！ 臍を大切にしろよ、臍によく言つておくれよ』（兩上等兵）
最後の結びに、倉本中隊長が、また顔を出して、

『こゝに居る百七十人の兵隊にも、皆、お母さんがある。』

其のお母さんは、日夜滿洲の空をのぞんで、息子の武運長久を祈つて居るのだ。

おい川合、お前、氣の毒だが、もう一度、皆に臍の價値の尊さを教へてやれ！』（倉本大尉）

『ハア。おい皆、臍を出せい、オーイ！』（藤澤上等兵）

伏線が完全に生きて、臍の萬歳でおしまひになる。

こゝでも私は、『正木博士の臍の話』からと、出所を明かにして居るのである。

四

もう一つ。

これを選擧の應援演説に結びつけて、嘗て長兄が市會議員の候補者として立つた時、

『あつても、なくても、どうでもいゝ臍ではあるが、それがないと、何だか腹にしまりがいや

うに思はれる。その臍の役目をつとめさせる爲めに、長兄を市會に出さうといはれるのならば、僕、また何をか言はんやであります。

なるほど、臍の役目位ならば、長兄もどうやら果せさうに思はれる。

もしその意味で、精進向上の門出ともいふべき初の市會に、嘘のいへない、融通のきかない、頼まれても悪い事のできない、細君以外に異性を知らない、朴念仁の長兄が必要だとあらば、私にも異存はない。是非、市民一致で、推薦して戴きたい。』

宏大なる哉臍の恩！ 私は衷心から、正木博士に深甚なる謝意を表して此の稿を終る。

式辭と挨拶

社交の要素

人間はどこ／＼までも社交的動物である。多數の人間が集まつて、一つの社會を組織し、一つの團體を組織する場合、必然的に起る人と人との接觸、人と人との交渉を、より滑らかに、より圓滿に、より幸福に進行せしむるものは、社交である。

絶海の離れ小島にうちあげられた漂流人か、吾から望んで、深山幽谷の中にわけ入り、草根木皮を衣食して生命を繋ぐ仙人に非ざる限り、人間は、一日だつて、社交なしには世の中を渡る事はできない。

人間生活のある所、必ず社交あり、社交なくして人間生活は營めない。これは、人間以外の動物世界では、全く見る事のできない現象である。

社交に、最も重要な役目をつとめるものは、座談と式辭挨拶である。

座談は、複白形式の式辭挨拶であり、式辭挨拶は、獨白形式の座談と解しても差支ない。

更に、碎いて申せば、座談は袴をぬいた式辭挨拶であり、式辭挨拶はモーニング、タキシードで、四角ばつた座談であるともいへるが、社交の要素としては、前者にも後者にも、甲乙、輕重はない。

然り、甲乙、輕重はないが、此の兩者は、社交界に於いて、それ／＼獨自の立場を持つて居るから、時としては、座談の方が、遙かに効果的な場合もあるし、式辭挨拶の方が、より効果的な場合もある。

殊に後者は、常に複數——多數の人々を相手とする爲め、直接、間接の影響は、どちらかといへば、後者の方が大きい。その一言一句に、特に細心の注意を要する所以である。

形式の相違

一口に、式辭挨拶といつても、必ずしも一樣ではない。その會合の性質や、場所柄、顔ぶれ等

によりて、其の形式、様式に、多少の相違ある事は勿論である。

たとへば、結婚披露と追悼會、壽筵と告別式とでは、式辭挨拶を述べる人の心持も、態度も、言葉も違はねばならぬ。

場所柄も同様、常設の式場、祭場、假設の式場、祭場、演壇の上、食卓の前、自らそこに別個の形式が生れて来る。

顔ぶれとても同様、先輩や、長上が多い場合と、後輩や目下が多い場合では、心がまへや、言葉づかひにも、相當、苦心を要する。

年端もゆかぬ若輩のくせに、長老先輩の前で、高慢チキな、きいた風な事をいふと、直ぐに、あいつは生意氣だと頭からどやされるし、後輩や、目下の人々の前で、あまりお世辭や、謙遜に過ぎると、何といふ不見識な人だらうと卑しまれる。

目上と目下とは、それだけの相違がある事を記憶せねばならぬ。

結婚披露の挨拶と祝辭

普通の形式としては、先づ媒酌人が、新郎新婦の経歴と、結婚成立までの経過をのべ、將來一層の厚誼を懇請する。

そのあとで、あらかじめ依頼されてある來賓の一人、二人が、一同を代表して、祝辭をのべるといふのが順序である。

中には、新郎側、新婦側の友人、知己が、入り代り立ち代り、祝辭をのべる場合もあるが、さうした宴席では、なくもがなだ。祝辭は一人か二人で澤山、我もくの押賣りは、新夫婦にとりても、來賓にとりても、決して有難いものではない。

最後に、親族を代表して、簡単に謝辭を述べる人もあるが、これは、あつてもなくても、どちらでもいいと思ふ。

媒酌人の挨拶の一例を申すと、

『今回、〇〇、□□兩家の慶事に際し、媒酌人として、新郎新婦を御紹介申上げる光榮を得ました事は、私共夫婦の、最も欣懷とする所であります。

新郎〇〇君は、△△縣の名望家として名高い〇〇家の〇男で、某大學の出身、現に外交官試補

として、外務省に勤務して居られる秀才であります。

新婦○○さんは、その昔、某藩の家老を勤めた名門○○氏の○女で、昨年、某高等女學校を優等で卒業された才媛であります。

此の秀才と此の才媛とが、出雲の神様の御許しを得て、今回芽出度く結婚式を舉ぐる事を得ました事は、○○、□□兩家の爲めにも、新郎新婦の爲めにも、此の上もない幸福として、皆様にも御喜びを願ひたいのであります。』

これは、極めてありふれた形式で、何も此の形式によらなければならぬといふ事はない。

もし新郎、新婦と、媒酌人との間に、特別な關係があり、年少少女時代から知つてゐるのなら、愉快な思ひ出話や、罪のない逸話でも挿めば、一層なごやかな紹介の辭ができあがると思ふ。

結婚披露の祝辭や、テーブル・スピーチは、あまり四角ばらない方がよい。といつて、あまり碎けるのも考へ物だ。

嚴格のうちにも、できるだけ情味あるものにした。時と場合により、ユーモアもいゝが、それはあくまで上品なユーモアであり、新郎新婦に對し、來賓に對し、禮を失しない程度にとどめ

たい。

もう一つの注意は、忌み言葉である。

古來、日本では、結婚式や、披露會の席上では、『サル』とか、『カヘル』とかいふ言葉を、つとめて避ける事になつて居る。

思ふに、『サル』、『カヘル』は、『去る』、『歸る』に通じ、新夫婦の將來に、不吉な暗影をなげかけるやうで、面白くないといふ心づかひらしい。

舊弊といへば舊弊、コンベンショナルといへばコンベンショナルだが、さればとて、何も依怙地になつてまで、強ひて反抗を試みる必要はあるまい。ひのえうまのやうな迷信と、同一視するのは考へ物だ。注意すべき事である。

歡迎會と送別會

歡迎會や送別會で、時々いやな思ひをさせられるのは、主賓を褒め過ぎる事だ。これは必ずしも歡迎、送別の式辭には限らないが、讚辭や推奨も、度を過すと却つて聞き苦しいものである。

無論儀禮であるから、多少のお世辭は、當然許容されるべきだが、物には程度といふものがある。小學校の年若い準訓導を、教育界の元勳といつたり、名もない村會議員を、天下の大政治家と持ちあげたり、金を持つて居るといふ以外に、何の取柄もない守銭奴が、どうかした拍子に、金の二三百圓も寄附したからといつて、天下の大慈善家の如く祭りあげるのは、自己の無智、無識を暴露するばかりでなく、あはせて、當人をも侮辱するものだ。

いつか、私が臨席した某大學の學長推戴式で、謹嚴そのものゝ如き總長が、素行上、兎角の非難が絶えない某博士を、品行方正の士君子の如く口をすべらして、満場の失笑を買つた事を、未だに記憶してゐる。

送別の式辭は、送らるゝ人物の地位、經歷、年齢等によりて、幾分、内容や形式に相違を生ずる。

たとへば、恩師の轉任を送る場合と、友人の出郷を送る場合、日本を代表して、之から國際的晴れの舞臺に立たうといふ外交官を送る場合と、オリンピックに運動選手を送る場合とは、そこに、自から輕重、大小の區別あるべきは勿論である。

前者の場合には、できるだけ、しんみりした、所謂真情流露、時としては、聲涙共に下るもよからうし、後者の場合には、宜しく華麗莊重の辭句を用ゐて、その行を壯にし、つとめて其の志を勵ますべきである。

新年會と忘年會

新年會や忘年會の挨拶は、割合に樂なやうで、案外にむづかしいものである。

何故かといふと、新年だの、忘年だのといふ言葉の響きが、既にありきたりであり、コンベンシヨナルだからである。よつほど氣のきいた挨拶でないと、すぐに舌打され、欠伸をされ、冷殺される。

殊に、先輩が大ぜい居るやうな場合、何だ、青二才が……と思はれたらおしまひだ。

『歲月流るゝが如く、今やめでたい新年を迎へまして』だの、

『光陰矢の如く、今年もいよく年末となりました』では、誰だつて謹聽する氣にはなれない。

いかにして此の型を破るべきか、どうすれば、新鮮味を加へる事ができるであらうか。そこが

一番むづかしい所だ。

その一つの試みとして、私は、川柳や、狂句などを、ノツケに出して見てはどうかと思ふ。忘年会なら、

何事も、あなたまかせの年の暮れ

年忘れ、忘れずとよい顔ばかり

來年の橋に手のつく年わすれ

こんな句でも、つかまへようによつては、相當に生きる。改めて例を示すまでもない。そこがウキツトの働きだ。

新築、増築、開業、開店披露

學校や公會堂の新築、増築の式辭や、挨拶は、大抵型がきまつて居るが、デパートの完成、店舗の新築、増築と改築、開店、開業の披露となると、千差萬別だ。重役の挨拶も、來賓の祝辭もそれ／＼、形式や、内容が違つて來る。

數年前、東京の上野松坂屋で、朝野の名士を招待して、盛大なる新築落成式を舉行した時、店主が起つて挨拶した。

『……多寡が一支店の新築落成式に、朝野貴紳の方々が、斯様に打揃つてお運び下さいました事は、光榮至極、何とも御禮の申上げようもない次第であります。

その昔、私の父は、安政の大地震で無一物となりました。私もまた、大正十二年の大震災火災で、父と同じ經驗を嘗めたのであります。

それにも拘りませず、今日、かうして、此處に皆様に御目にかゝる事ができました事は、全く御得意様方の非常なるお引立と、特別なる御援助の結果に外なりません。此の點、私は申すに及ばず、店員一同の衷心より感謝してやまない次第であります。

御承知の通り、手前共の店員の重なる者は、大抵、二代三代、先祖代々の縁故者ばかりで、いづれも、誠心誠意、忠實なる協力者である事は、不肖の最も誇りとし、且つ欣快とする所であります。(中略)

幸ひに今回、外觀だけは、どうやらデパートらしく出来あがりましたが、内に働きます者は

いづれも何十年、何百年來の古い關係者ばかりでございます。

今日、かうして皆様の御光臨を仰ぎましたのは、一つは新館を御覽願ふと同時に、これから先き、萬事につけて皆様の新しい御指導を仰ぎ、古い頭を叩き直して戴きたいといふ念願であります。』云々

之に對して、八十六歳の石黒子爵が、來賓を代表して祝辭を述べた。

『こゝにお出の皆様のうちで、今日より七十六年前、此の店で買物をなすつた方は、恐らく私一人であらうと思ふ。』

私は、貧乏士族の子で、その頃、家は淺草の三筋町にあつた。そこから母につれられて、こゝのお店に買物に參つたのです。(中略)

今でもありぐと私の眼に残つて居るのは、白壁、二階造りのがツしりした家作りで、私共は暖簾をくぐつて、店で、父の羽織を注文して歸つたのですが、その時、母は、此の店で、十兩以上の買物をする、二階に通されて御馳走される。お前も早く立派になつて、十兩以上の買物をし、母をつれて、二階で御馳走になるやうになつておくれといはれました。

その私が、今日、一兩の買物もせぬのに、二階は愚か七階の此の高樓で、かやうにお手厚い御馳走になる。——誠に、當年十一歳の子供として、此のお店に買物に來た七十六年前の私としては、感慨無量と申す外はありません。

それに、今承れば、専務も、營業部長も、建築擔當者も、今日の餘興に出て踊つた娘さんまで、或ひは三代、或ひは七代、代を重ねての縁故者であるといふ——。何といふ頼もしい事でありませう。此の御店の礎いよゝ堅く、いや榮えに榮えゆく何よりの證左として、心から御喜びを申上げる次第であります。』

此の挨拶、此の祝辭、共に双璧として推獎する價值がある。

落語に、『牛ほめ』といふのがある。薄馬鹿の息子が、父の入れ智慧で、叔父の家の新築落成を褒めに行つて、散々に失敗したといふ馬鹿々々しい話だが、これも、話しようによつては面白い材料になる。

『砂の上に家を建つるなかれ』といふ聖書の言葉も、何かのヒントにならう。もう一つ。

蜀山人が、或商家の開店祝ひに招かれて、歌を一首、所望された。

山人、早速筆を取つて、『此の家は、貧乏神に囲まれて』としたゝめると、主人は急に不機嫌さうな顔をして、『よしなき事を』といはんばかりに眉をひそめる。

早くも、それと見てとつた山人は、ニヤリと笑つて、

『御主人、これでは如何でござるな。』といひながら、『七福神の出どころがなし』と書いてくれたので、その家の主人は大喜び、今迄の澁面が、忽ち笑顔に變つたといふ話がある。これなども、挿話や、話のまくらとして面白いと思ふ。

一體商賣人には、縁起をかつぐ人が多いから、神経の昂ぶり勝ちな開店、開業祝ひなどによばれた時に、氣にかゝるやうな言葉は、慎しむ方が無難である。

就任、新任の挨拶

場合はいろいろあらう。婦人會長、青年團長、理事長、幹事長の推戴式、新大臣、新重役、新部長、新課長の歓迎會、さうした場合の新任、就任の挨拶は、いはゞその人の試金石のやうなもの

のであるから、一言一句も苟且にしてはならぬ。

といつて、あまり緊張し過ぎて、無暗に四角ばつても、部下の人々に、好感を與へる事はできない。

謙遜のうちにも、烈々たる信念と、誠意とを披瀝し、部下ならびに會衆をして、言外に、

『此の人は頼もしいぞ。』

『此の人なら信頼できるぞ。』

『此の人の下なら、思ふ存分働けるぞ。』と思はしめねばならぬ。

『何だ、これが今度の會長か。』

『今度來た部長は、案外おツちよこちよいらしいぞ。』と思はれたら、おしまひだ。

謙遜も、度を過せば退嬰的に聞える。自信も、程度を越すと傲慢にとられる。そのコントロールがむづかしい。

告別式と追悼會

告別式の式辭と、弔文は、短いほどいい。

といつて、『○○會は、□□君の逝去に對して、深甚なる弔意を表す』では、あんまり呆氣あつけなさ過ぎる。味もそツけもないとは此の事だ。これだけぢや、深甚なる弔意なんか、どこにあらはれようもないぢやないか。『深甚なる』といはなくとも、聽く者の心に、ピタリと來るものがなくてはならぬ。

追悼會となると、最初から、集まる人々は、誰かの追悼演説があるものと豫期して來るから、多少長くても辛抱するが、葬場や祭場で、起立したまゝ、ありふれた形式的の告別演説を、二十分も三十分もきかされては、會衆がたまらない。

追悼演説のやり方には二種ある。

會衆と共に、故人の遺徳や佛を偲ぶといふ心持で、専ら會衆の方を向いて思ひ出を語るのと、故人の寫眞や繪姿に向つて、哀悼の辭をのべるのである。

私は、かつて、故平岡信敏氏の追悼童話會に、發起人總代として哀悼の辭をのべた事がある。その時、私はいきなり、

『普通の形式から申しますと、先づ、主催者若しくは發起人總代が、開會の趣意を申上げるべきであります。本日こゝにお集まり下さいました方々は、殆んど全部が發起人であり、故人の知己朋友であり、悉く昵懇の人ばかりであつて、最初から、本日の會合の趣意を十二分に御承知の上、お集まり下さつたのでありますから、私から改めて申上げるまでもないと思ひますので、甚だ僭越ではあります。諸君を代表して、私から、平岡君の靈前に、此の會合を開くに至つたまでの一切の道程を報告して、皆様に對する御挨拶に代へたいと思ひます。』といつて、會衆に一禮し、改めて、舞臺に飾られてある故人の寫眞に正面して、

『平岡君！ 君が此の世を去られてから、今日で丁度まる二ヶ月になる。往事茫として夢の如しといふが、あの時の事を考へると、全く夢のやうな心地がする。』といつた調子で、しんみりと思ひ出の數々を話したあとで、

『見給へ、堂にあふるゝ今日の會衆を！ これが、皆、君の先輩、知己、友人、もしくは君の得意の繪筆をきいた人達ばかりだ。君の徳の然らしむる處とはいへ、いづれも、忙がしい一日の仕事を擲つて、かうして君の爲めに集まつてくれんだよ。實に嬉しいぢやないか。』

君の遺孤四人、皆健在、母堂の愛の懷に抱かれて、令弟清君御夫婦の、温かい家庭に引取られ、今日も、朝から、こゝに列席して居られるよ。ちや、これからいよいよはじめるから、大きな眼を見開いて、ゆっくり、皆の心づくし、美しい友情の發露を見てゐてくれたまへ。』
こゝで、再び會衆の方に向き直つて、

『終りにのぞみ一言、御來會の皆様、御禮とお詫びを申し上げます。唐突の企、十分なる準備の時日がなかつたにも拘らず、切符は全部賣切れとなり、豫期以上の好成績をあげる事が出来ましたのは、偏へに皆様の御懇情と、御盡力の結果であります。會がすみ次第、直ちに精算の上、詳細收支の御報告を申し上げますが、本日御出演下さる方々は、殆んど全部がサービスで、働いて下さる役員方も、悉く手辨當であります。唯だ設備萬端、不行届の點々が多々あります。眞に申譯ない事ではありますが、それは凡べて、世話役たる私の至らざる所、謹んで御詫びを申し上げます。』
これで、丁度二十分位かゝつたと思ふ。
サンプルの一つとして、お読み流しを願ひたい。

即 席 演 説

懇親會、親睦會などに顔を出すと、時々不意打的に幹事から、『何か一席お願ひします。』と指名されて、閉口する事が屢々ある。

即時即興といふ事もあるが、かう突然では、日頃、相當雄辯家を以て任じてゐる人でも、まごつくのが當然だ。

要領は、百字文、千字文の作法、あれがコツである。ウキツトのある人なら、大抵ドヂを踏む事はない。時と場合にもよるが、原則として、輕妙で上品なユーモアが歡迎され、共鳴され、喝采される。さういふ時の用意に、日頃、氣のきいた逸話や笑話、川柳、狂歌などを暗記して居ると、こんな時の役にたつものだ。

まだある。推薦、應援演説だが、それは別項で御覽を願ふとして、最後に、自己紹介に就いて一言を申添へる。

自己紹介の仕方

縣人会だの、懇親會だの、親睦會だの、めつたに顔を合せない人々の會合に出席して、時々出ツくはすのが、『自己紹介』である。

豫定のプログラムが終つた頃、食事のすんだ頃を見計つて、幹事が起つて、満場の同意を求め

る。
『まことに唐突の催しであります。殊に幹事が慣れませんでした、とんでもない時に御案内申上げましたので、御來會下さる方々は、精々十四五人止りと覺悟して居りました處、案に相違の此の盛會、〇〇閣下をはじめ、縣出身の名士先輩の方々が、かく多數御來會下さいました事は、幹事一同、此の上もない面目として、感謝に堪へざる次第であります。

お見受けいたしました處、日頃から、お名前だけを知つて、一度もお目にかゝつた事のないお方、お顔は存じて居りながら、御出身地や、現在の御職業を承つた事のないお方が、大分お見えになつて居るやうでありますから、此の機會を利用し、皆様の御賛成を得て、〇〇閣下から御順に、できるだけ簡單、明瞭に、自己紹介をして戴きたいと思ひますが、如何でせうか？』
拍手滿堂、早速、指名された〇〇閣下から、自己紹介の幕が、きつて落されようといふ段取りである。

二

かういふと、諸君のうちには、

『自己紹介？ 何の事はない、自分で自分を紹介すればいゝんだらう。自己紹介の仕方なんて、四角ばる必要はないぢやないか？』と、いはれる方があるかも知れない。

まことに其の通りである。

演説や講演と違つて、常識のある人なら、誰にでもできる事ではあるが、さて實際に當つて見

ると、これが中々むづかしいものである。

『私は、尾張中村の産、木下藤吉郎秀吉と申す者であります。どうぞよろしく。』

『私は三州岡崎の城主、徳川家康の家臣、酒井左衛門尉忠次であります。どうぞお見知り置きを願ひます。』

これが普通の形式である。然り、最も簡單にして明瞭なる仕方ではあるが、さて、いかなる場所、いかなる會合にも、此の形式、此の仕方を應用してよいかと申すと、決してさう無造作には參らない。

第一、吾々は、さうした場合、先づ、自己の立場を考へなければならぬ。

全會衆に對して、自分は、どんな立場に居るかを考慮しなければならぬ。階級は如何、學識は如何、社會的地位は如何。それによりて、自己を、どの程度にまで全會衆の前に投げ出してよいか、それを考察するのである。それが最も賢明なるやり方である。

三

一例をあげる。

内閣總理大臣廣田さんが、縣人會に出席したとする。

幹事の指名で、自己紹介をやるとする。

『私は、縣内某市某町の生れで、目下内閣總理大臣を勤めて居ります。どうぞよろしく。』

これでは、しやれにならない。

言葉は、極めて謙遜に聞えるが、それをきい居る會衆は、いかにも馬鹿にされたやうな感じがするに違ひない。

その場合、會衆は、一人だつて廣田さん知らない人はない筈だ。彼が内閣總理大臣である事は、千も萬も承知の筈である。

『なんて、しら／＼しい男だらう。』

『ひとりであらぶつて居る。いやな奴だ。』

かう思ふに違ひない。そんな場合、靜かにたつて、

『廣田であります。』

莊重な一言、それで澤山だ。

もし出身地、出生地が、誤り傳へられて居るやうな場合、それを訂正する意味で、

『廣田であります。何かの新聞に、〇郡〇町の出生と出て居りましたが、あれは誤りで、實は△市△町であります。』と附言するのは差支ない。のみならず、會衆に一種の親しみを感じさせる事にもなる。

四

反對に、私が、縣人會で自己紹介をやるとする。傲然として、

『安倍季雄であります。』と言つて、そのまま着席したらどうであらう。そんな男が、縣人中に居たのか。どこの生れで、何をして居る男だらう、傲慢な奴だなアと、爪弾きされるに違ひない。

その場合、慇懃に、

『安倍季雄と申します。鶴岡市の生れ、目下大阪毎日新聞社及東京中央放送局に關係し、専ら子供の仕事にたづさはつて居ります。どうぞよろしく。』

かういへば、

『あゝ、ラヂオや講談社の雑誌などで、ちよい／＼名前を見うける安倍といふ男は、あの人か』と首肯してくれるが、同じ筆法で、若い童話家——各種の會合で、ちよい／＼顔を合せる連中のあつまりに、私がしかつめらしい顔をして、同様の挨拶をのべたとしたらどうだらう。

『安倍といふ男は、齒の浮くやうな、いやな奴だ。』といはれるに違ひない。

要は、言葉の意味は同じでも、時と場合、會合の性質、會衆の顔ぶれにより、發表、表現の形式をかへなければならぬといふ事、これは些細の事のやうで、決して小事ではないといふ事を、記憶して戴きたい。

五

もう一つ、場所柄を辨へない人が、よく、それを機會に、自家廣告をやつたり、自己宣傳をやつたりする。

あれほど聞きぐるしい事はない。

あらゆる機会を捉へて、一寸でも自己をのばさうとする心がけは諒とするが、その爲めに、さ
 もしい奴だ、禮儀を知らない奴だと思はれるのは、將來のために、決して得策ではないと思ふ。
 分相應、謙遜、矜持も、度を過ぎぬやう、よく場所柄を考へ、自己の立場にかへりみ、大勢な
 ら大勢のやうに、短時間なら短時間のやうに、簡単に自己を紹介する。それが最上の『自己紹介』
 の仕方であると思ふ。

お話のコツ 終

昭和十一年四月二十日印刷
 昭和十一年四月二十五日發行



お話のコツ 【定價一圓二十錢】

著者 安倍季雄

發行者 柏熊俊司
東京市麴町區下六番町二十七番地

印刷者 岩崎松之助
東京市小石川區表町五十番地

東京市麴町區下六番町二十七番地

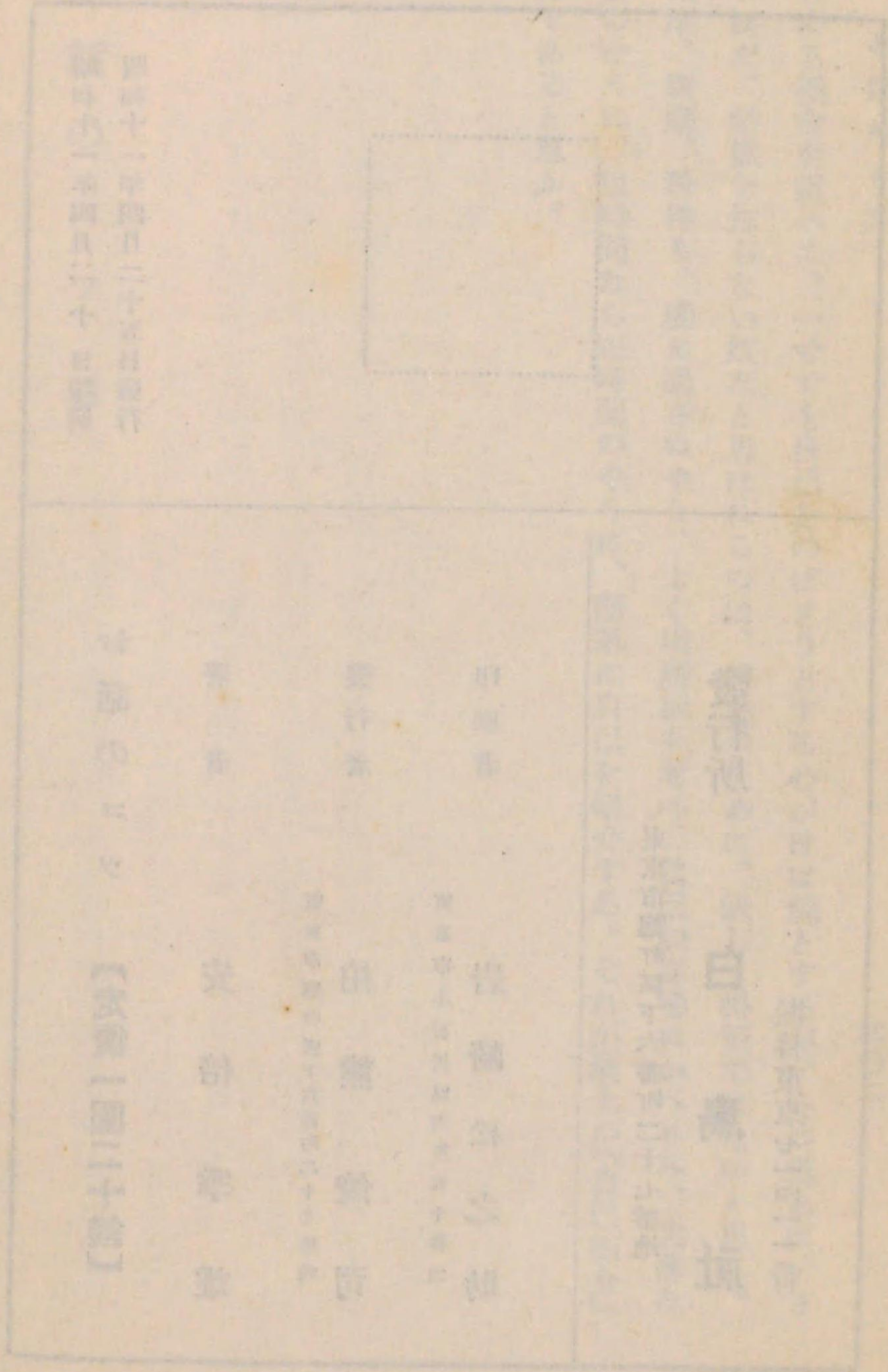
發行所 白鳥社

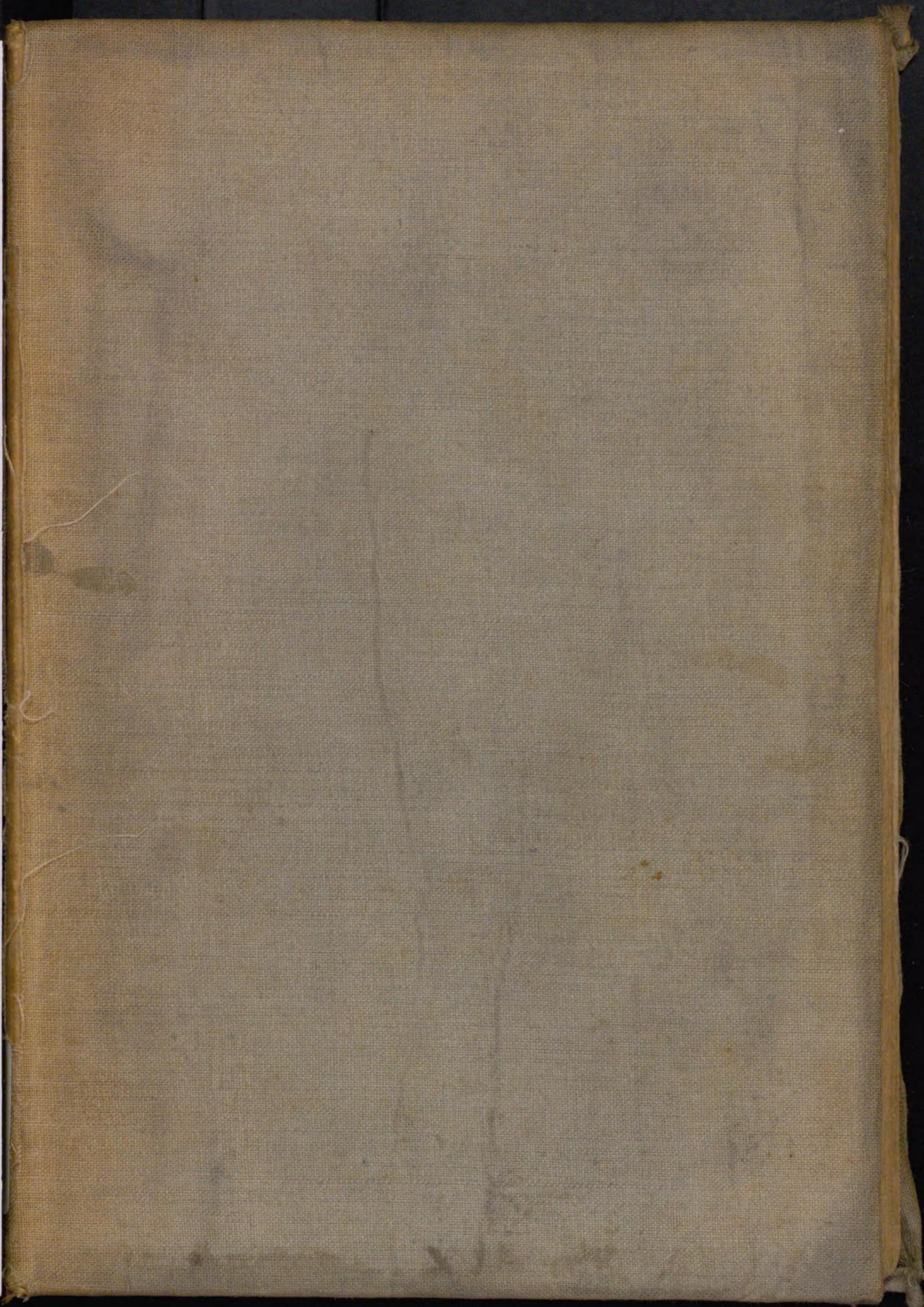
振替東京七一四二番

圖一
圖二
圖三
圖四
圖五
圖六
圖七
圖八
圖九
圖十

第一
第二
第三
第四
第五
第六
第七
第八
第九
第十

【圖一】



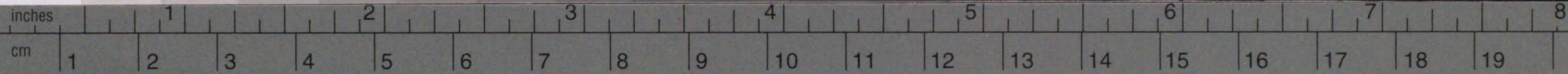


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

